

### 付録 ライフストーリー紹介

以下の諸個人のライフストーリーは、筆者自身による一対一の対面的聞き取りの成果である。菊地修二氏は、北海道アイヌ協会様似支部の支部長であり、熊谷カネ氏は様似民族文化保存会の会長である。また、古鍋牧子氏は、北海道アイヌ協会様似支部で生活相談員として勤めている。以上の3人は、アイヌ民族の方々である。そして、高瀬純治氏は、最近まで北海道アイヌ協会様似支部の副支部長を勤めており、佐々木みどり氏は、支部活動および保存会活動において仲間と共に中心的な役割を果たしてきた。この2人は、アイヌの人々と長期間にわたって活動を共にし、また生活を共にしてきた和人のの方々である。各人の詳しい経歴については、以下の記述に委ねたい。聞き取り調査にご協力いただきましたこれらの方々に、記して感謝いたします。

#### \*菊地修二氏

——支部長として活動されていらっしゃるんですけども、実際にこの支部の活動ですか、保存会の活動ですとか、アイヌ民族の活動にかかわりはじめたというのはいつぐらいからになるのでしょうか。

うんとね、30歳くらいだね。

——それは、何か理由があったことなんですか。

私の生まれたところはね、漁業といたっても、夏に昆布取りをするくらいしか、仕事が無かったんだね。それ以外、よそで働く、町内にいい仕事があれば町内で働くんだけど、ないから、町外で働いた方が収入が多い場合が多いからね、高校卒業してから27歳まで、昆布取りはもちろんな家の仕事だから夏に手伝って、それ以外他は他の漁船、釧路の方とか、羅臼の方とか、その間にも運転手したり、土方したり、いろいろなことをして、27で家内と知りあって、28で結婚をして、29で長男ができたから。それから、まあ結婚してからやっぱり、家内を置いて出稼ぎをするつゆうのも、まあ若いから、両方ともしたくないから、ずっと様似に定住するようになっただんだ。で、30ぐらいの時に、父が様似支部の役員をしていたんだけど、私が定住するようになっただんだ。父と私が役員を交代するから、協力せざるを得ないかた事に、最初になったの。その後、支部活動に、もちろん理事だから参加する、協力せざるを得ないかたちに定住したんだよね。で、理事を任期やつたのかな、まもなく支部長にさせられてんだわ。で、そのときの前支部長がいろいろ教えてくれたり、なんだから、前支部長が自分の本業をやったり面立できれば一番いいんだけど、本業をおろそかにしながら支部長を続けるのは、もうこれ以上は大変だみたいな感じで、支部長を引退したいという話で、前支部長から私に引き継いだの。で、現在に至ってる。

——その30歳くらいで支部に入られたときに、この組織はアイヌ民族の組織なわけですけども、アイヌ民族のことをやるっていうのは、何の抵抗もなくやれたんでしょうか。

いや、非常に抵抗があった。うんとね、私の幼いときから、やっぱり両親はいち早く同化政策にもとづいて私たちを育てたから、アイヌとして生きるよりも、ごく一般の日本人として暮らす方が子供の幸せにつながると思うんだ。アイヌのことは一切教えてくれなかったし、まあ自分がアイヌの血を

引いてるらしいっていうのは子供の時から気づいていたけども、だから家庭環境がそうだったからね、アイヌ側から言えばシャモ、シサム、それは日本人を養ってるんじゃないかと、善き隣人という意味なんだよね、そのシサムにアイヌが差別されてる、いじめられてるっていう現場を何度も見たことあるからね、子供ばかりじゃなく大人もね、だから最初、父と交代して役員をした時は、非常に抵抗があった。

——それでもやってみようと思ったのは、お父さんにすすめられたからということなんですか。

いや、父はそんな時にもすすめなかった。何も言わなかった。当時生活相談員をやっていた季節さんて女性がいたんだ、もう亡くなっていないんだけど、その人が、もういつまでも年老いた先輩たちに任せよりも、まあそれが必要なんだけど、若手を教育しなきゃならないって感じていたと思うんだ、今思えば、それで、彼女の強いすすめがあったような気がするんだね。

——それで、じゃあちょっとやってみようかというふうには…

まあ父もやっていて、で、相談員からすすめられた、「ちょっとやってみようか」って、当時の気持ちを思い出そうとしてもなかなか思い出せないけども。

——その頃、支部に入って、理事になるということとは、アイヌ文化の踊りですか、いろいろあると思うんですけど、そういうのもやはりはじめるといふことなんですか。

うちの理事の時には、一切しなかった。で、副支部長になったときにね、民族衣装…、副支部長になるとね、日高地区連合会という組織の役員しなきゃならないんだわ、理事が監事、そういうときに先鋒アイヌ、まあ様似じゃない日高の役員が集まった時に衣装を身に着てくる人も稀にいたり、他の支部の総会で着てる人もいたり、またはイチャルパで着たりする人もいたりして、連合会役員だから他の支部でイチャルパやる時には案内の手紙がくるから参加しなければならぬ、そういう時に私は当初はスーツだったんだわ、ところが季節相談員が衣装を持って行って、「副支部長、これ着てちょうだい」と、そういうことで着るようになっていったんだね。その時もやっぱり、アイヌの衣装を着るのは非常に抵抗があった。

——その時の感覚というのはなかなか思い出し難いかもしれませんが、たとえば好きとか嫌いとか、そういう感情っていうのはあったんですか。

自分がアイヌだということについて？

——それも含めて、アイヌの着物を着たりとか…、好きとか嫌いっていう問題じゃないですか。

いや、嫌いだっただんだ。だけど、副支部長っていう立場と連合会役員っていう立場、ずっと理事っぽかりやっていたけど、その立場上、嫌でも着なきゃならぬ。季節相談員は私の家の隣に住んでいたのでね、で、私よりかなり先輩で、けっこうリーダーシップもある人だったからね、たぶんうまく操作されたんだと思うよ。あとは、嫌がっていたけど、将来使い物になるかもしらんっていう考えもあったのかもしらん。彼女の影響っていうのは、私には非常に大きく作用したと思う。

——それは外からの影響が強かったということだと思ってるんですけど、内側からのというか、自分がアイヌだということやアイヌの着物を着たりすることを嫌いで思っているがらでも、でも、その副支部長としての役割を果たしていく、そういう気持ちになる、目的みたいなのもあってあったんですか。

ない。まあ、その時は、そういうのは全然発生してこなかった。ただね、アイヌ対策というかたちで国からの援助があるよね、家もけっこう古い家だったし、いずれ建て替えなきゃならない、子供も成長したら学校に進学させなきゃならないし、そういうふうなものを利用したいという気持ちの方が強かったからね。住宅建てたいっていうのも…、けっこうアイヌの人ってね、高学歴って少ないから、そういう銀行の窓口に行って、家を建てるお金を貸してほしいって言うことが得意な人って、あんまりいないんだわ、私もその一人だったから、まあ会員になっていけば、支部の相談員に相談して書類を作成してもらって、そして住宅資金を活用できる。それ、いたただくんじゃなく、借って返済しなければいけない。高校に自分の子を進学させるとなると、就学資金というかたちの、それは補助なんだから、それを利用して、大学進学も就学資金あるけど、それは貸付で、返さなきゃいけないんだわ。まあ、これは国の考え方なんだろうけど、最低、高校進学、卒業くらいまでは手を差し伸べまじょうと、大学はそこまでは必要はない、ただ必要であればお貸ししましょうと、そういう程度の考え方じゃないのかな。そういうふうな仲間のためにとか、そんなことはたぶん考えてなかったと思う。

——その時の支部の活動をやってらっしゃる人たちが全体の雰囲気なんかでも、そんな感じだったんですか。他のところでは、文化のこともやっていこうというふうな盛り上がりというふうなものもあつたんですか。

あつた人もいたんだらうけども、他の人のことまではわかんないな。李沢相談員は、いざいアイヌ対策、ウタリ対策でなくなればいいんだって。なぜそんなふうに言ったかについていうと、今の国、この道の援助で、一般道民と生活格差がなくなったら、逆に同じ日本国民になったにもかわららず、生活格差のなくなった同じ日本人としていつまでもそういうものをもたらる方が差別にならなくなるんじゃないか、だから進学率、学歴も一般道民と同じくらい、持ち家も持って、そして収入も一般道民と同じくらい、その差がなくなつた時にはいざいなくない方がいいという考えを、李沢さんの考えをこう聞いている。で、支部長になつてからね、本部の理事も務めなきゃならない、で、いろんな人と知り合うきつかけも多くなるし、知り合った人から考え方、そして組織のあり方方も勉強させてもらう、そうしていく段階でやっぱり…、うーん何で言うんだらう、自分たちアイヌ民族はけっして差別されたり、蔑まれたりするようなものじゃないということに気づいていったと思うんだ。であれば、やっぱりきちつとした目線で見てもらう、相手からね、シャモの方々からね、そして、何で言うんだらうな、そういう気持ちが発生したのは支部長になつてからだね。

——ちなみに、支部長になられたのは何年くらい前のことなんですか。

3期やってるから6年かな。

——支部長になられた頃、文化のことをやってみようとは思ってませんでしたか。

うーん、文化やってる人たちは関心があったり、わりと好きだからやってみようって言う捉え方をしていたんだわ。それからね、ある時、保存会の人たちは衣装ついたり、本番の時は必ず衣装つけるから

ね、そういう人たちは好きでやってみようみたいだと思っていたんだだけでも、保存会の一人の人からね、私たちが支部のためにやってみようってると、時間割いで練習して、そして保存会として参加する、支部のためにやってみようってると、その人は、私たちは支部のために犠牲になつてるとまで言っていたからね。で、平取支部で毎年、何月かな、2月から3月にね、シシムカ、アイヌ文化交流会みたいなこととするんだわ。それに横以支部の保存会が出席して、ステージに上がった時に、私はまだ支部長になりたての頃だね、袖の方で、なんも協力できないから、踊りだつて練習したことないし、なんの協力もできないからね、袖の方で手拍子でなんとか協力したんだわ。保存会への協力は、それが初めてじゃないかな。したら、李沢相談員がね、いやや、今度の支部長は、こうやって保存会がステージに上がったれば、こうやって手拍子やってみようって、終われば拍手してくれて」って言って、大層喜んでくれたんだわ。まあ、着められたいと思うんだね。それから、やっぱり喜んでくれると、私の方もね、もつと喜んでくれるようなことをき言つたようなかたちで、そういう人たちはそういう人たちが頑張っていたきたい、私は私の役割で出来ることをするんだ、みたいな、そういう感じがあつたんだ。

——アイヌのことが嫌いでおっしゃってましたけど、それが今度、人の喜ぶ顔を見て、考えが変わつてくるっていうのは、そこでいきなりガラッと変わってしまうのですか、それとも、少しずつ変わっていくようなものがあつたんですか。

そんなガラツとはいいかないよな。

——差し支えない程度にお答えいただければということなんですけど、30歳以前のことで、支部の活動などとは別に、普段の生活のなかでアイヌのことを聞いたり、アイヌであることを感じるような経験と

外見一般の特徴が、アイヌと和人では違うからね、毛深いとか、影が深いかつちゅうり…、まあ、一般の和人の人でも毛深い人も影が深い人もいるから、だけれども、平均的には、一般和人は体毛が薄いし、アイヌは濃いんだわ、だから近くの体毛の薄い子から毛深い、毛深いってよく言われたね。やっぱり、毛深い嫌だったしね。

——さきほどちょっとお聞きしましたが、お父さんもお母さんも、アイヌとして生きると幸せになれないから、そうでないように生きてほしいと思つていたということでしたが、子供たちにはアイヌのものをみせないようにということはおつたんですか。それとも、元から、そういうのがないといつた環境だったんですか。

母の母が細粒なアイヌでね、母の父ついでいうのは学校の先生だったんだわ。土人学校のね。岡田、今チセ作りしてるところからちよつと離れた所にね、アイヌの子どもたちばかりを集めてね、同化教育をしていた学校があつたんだわ、通称、土人学校って。法律では、アイヌの位置づけは旧土人てことになつてきたからね、その子らを集めて。そこで、私のおばあちゃんになる人が学校の先生とのあいだに子供を作り、生まれたのが私の母なんだわ。だから、母は二分の一のアイヌなんだわ。父は、阿蘇がアイヌで、だから、私は四分の三だね。たぶんね、私のおばあちゃんになる人は、私が生まれた時には亡くなって、一度も見たことないんだけど、その人の時代からもう同化政策で教育されているから、アイヌ又阿土の結婚よりも、和人と結婚して、子どもが早く早く同化するようなことが幸せにつながると思つ

たんじやないか。だから私の母も、親からはほとんどそういうことは教育されなかつたらしいんだ。で、その私のおばあちゃんになる人は、その私の母を運んだ後に、もちろん結婚できないから、先生は奥さんもいる人だからね、別の和人と結婚したんだわ。その下に、弟やら妹やらができて、その人に私の母も育てられたんだわ。

—そのような家庭環境があって、30歳ぐらいで支部に入られたのですね。それから、アイヌとして生きるという気持ちになつたんでしょうか。

うん、もちろん、今はそういう気持ちでやってくるからね。それだって、かなり前からっていうんじゃない、さっきも言ったように、本部の理事をやって、そしていろんな先輩に教えてもらったり、自分で若干勉強したりするようになった時期くらいから、堂々とアイヌとして生きようよと。

—それ以前は、同化した方がいいって言う気持ち…

同化って…、私自身の気持ちのなかで同化したって気持ちもなかつたし、アイヌとして生きていたいって気持ちもなかつた。本部理事をやるようになってから、一般和人の誤解も解消しなければならぬ、そして同じアイヌの仲間たちも自信をもってアイヌと言えようとするような社会作り、これは絶対必要だなんていう気持ちにもなつてきたのさ。

—類似支部の保存会では、これまで様々な活動をしてきていると思いますが、そういうものにも関わるようになってきているのですか。今は、チセ作りをやっているわけですが、他にもいろんなことをやるようになってきているんですか。

うん、保存会の会員の一人になつて、エムシ・リムセやるからね。今回、総会終わって、道庁の前の広場で保存会の女性の踊りを見ていただいたり、エムシ・リムセも見えていただいたり、他から要請があれば結構やってくるんだわ。それも、こう、今でもね、疑似もそうだけれども、道内あちこちにね、アイヌであつてもアイヌと言えない仲間がいっぱい居るんだわ、だから、そういうことを私試したいし、だから「やれ」って言うんじゃないかと、そういう人たちに堂々と「私はアイヌだ」って言葉えるような気持ちになつてもいいから、どこでも「アイヌでありますよ」って言うような…

—誇りのようなものを示しているのですね。

うん。

—僕は、東京でアイヌ民族の活動をしている人たちにいろいろ聞いた経験があるのですが、その時よく聞かされた話がありまして、それは、ある時、人に誘われたりすることアイヌ文化のことをやるようになって、やれるようになってきたんだだけでも、当然それをやるようになってから、それをやり続けていいんだらうかと、すんなりアイヌとしての誇りを持って生きていくんだって言う気持ちになれないっていう…、描れるっていうか、そういうことをよく聞いたのですが、そういうこととお悩みになることはありませんでしたか。

なかなかね、やっぱり差別を体験したり、目の前で差別が繰り返り広げられたりしてのね、列車のボー

ント切り替えるようにね、今日からこつちに気持ちを切り替えるなんて難しい、時間がかかる。活動はしていないが、本当に、抵抗感から抜け出せなかつたり、これでもいいんだらうかって思ってる仲間は大勢いると思うよ。やっぱり時間が必要だと思う。そのために、そういう自覚が生まれたら、誇り、自信が生まれたら、そういう環境作りをしないか、[誇りを持って、自信を持って]って言ったって、そんなことできないうんだからね。やっぱり、今回、国会も「アイヌを先住民族と認める決議」をしてくれたわけだよ、いい流れだと思ふんだ。そういうふうなまじりとしたアイヌの歴史・文化を知つたうえで、差別もなくなる、アイヌにも自信も誇りも生まれてくるかもしれないんだよ。そういう環境作りだよ、大事なのはね。

—差し支えない範囲で、ご家族のこともお聞かせいただけたらと思うんですけど、今、相当忙しく支部の仕事をしてらっしゃると思うんですけど、それだけ仕事をすることには、特に奥様なんかの理解が大切かと思ひますが、その点に関しては、どんなアイヌの活動をやってほしいという感じなのですか。

もちろん、そう。さっき話した、27に知り合つて、というのは、羅臼で当時ね、すごいスケソウの獲れた時期があつたんだわ。で、内輪の乗組員だけでは全然不足するからね、こつちから向こうに働きに行つて若いモン、かなり居たんだわ。で、私も誘われてね、向こうに働きに行つたんだわ。そこで知り合つたんだ。当時、1月から3月下旬まで働いて、200万円以上の乗組員への給料を支払われたからね、すごい魅力的ですよ。で、知り合つて、次の年に結婚して、そして、さらに次の年、長男が生まれて、長男が昭和57年に生まれてるんだ。で、それからもちろんさっき言ったような話になるんだけど、それで家を新築できたり、子供を進学させたなりなんかできて、長男は高校までだったけど、次男、三男は大学まで進学したのも、ウタリ協会があるから私たちの子供たちをそこまで進学させることができたと家内も考えているから、私のできることは、ウタリ協会でやってくる活動ね、これを家内はかなり理解してくれていて、家内の理解がなかつたら私の支部長としての仕事は、これは絶対できないと思う。

—今ですと、アイヌとしての誇りをもつてということでしたが、それを今度、次の世代に伝えていくっていうことを考える時に、たとえば、自分のお子さんですか、伝えていくっていう気持ちはお持ちなのでしょうか。

もちろん。

—保存会に入って、それをやってほしいといった気持ちはあるのですか。

もちろん、あるよ。ただ、そう思つてもね、上から押しつけるようなことをしたら、抵抗を感じるからね、私がやつてゐることを見て、やれる形になればいいかなって思つてゐる。高校生くらいになると、私子供三人いるんだけど、長男が57年、次男が59年、三男が61年に生まれてるんだわ、支部も参加してる日高地区連合のソフトボール大会があるんだわ、ソフトボールができるくらいに身体になつたら参加させてからね、子供らは抵抗なく協力してくれてるんだよ。そういうふうな抵抗ある者にやらせようと思つても、逆に嫌になることが多くなつても困るから、私がやつてゐる支部の活動を見て、そしてやってみようとか、入つてみようとか、自然にそういう気持ちは発生すれば一番幸せだつて思つてゐる。これだね、親がアイヌであることを隠したり、和人と同化するのが一番幸せだつて思つてゐるような、さっきの環境作りじゃないけど、それだけはしたくない、アイヌが嫌だつて思つてゐるような環境作りだけはしたくない

いと思ってる。

——さきほど、李沢相談員の影響が大きかったとお聞きしたんですけど、何か印象深かった出来事とか何かありましたか。

喧嘩したのが一番思い出すな。あと、やっぱりシンリムカで支部長が手拍子してくれたって喜んでくれた顔も忘れられないね。ほかの踊り手の保存会員に今度の支部長はここまでして言ってくれてね。前支部長のことを悪く言うつもりはないよ。私も似たような気持ちだったから、前支部長の気持ちがよくわかるんだね。やっぱりスーツを着て来賓のところで見てるだけの人の人だったから。

——李沢相談員とは、支部に入ってから付き合ってたんですか。

いや、ずっと子供の頃から見えた。李沢相談員も私の隣の隣で生まれてるんだね。で、そこでずっと青って、外に働きに出たときもあつたかもしれないけど、私もその隣の隣で生まれて青ってるから、ずっと見て、で、私のところでは今でも昆布取りをやってるけど、昆布取りって家族だけだと手がまわらないから、他人の手も借りなきゃならないんだね。そういう時に李沢相談員にも手を貸してもらったり、相談員の妹、その方にも手を貸してもらったりして、そういう付き合いもしてたから。

——子供の頃からそういう付き合いがあって、そういう個人的な付き合いがあるっていうことが、あの李沢相談員のすすめだからっていうのが大きいんですかね。これが全く違う付き合いのない人だったら……

うーん、李沢さんの影響はすごく大きいものがある。けど、さっき言ったようにね、対策事業の利用っていうのも頭の中にあつたからね。で、今のようにな、昆布取って、干し場に運ぶたつて、今みたいな四駆とか軽トラなんてほとんどなかったからね、今は自動車でも北海道では四駆が普通だからね。で、その頃、昆布運搬機っていうのが導入されたんだね、私が理事になってすぐのあたりに。そういうものも、うちでも補助をうけて利用させてもらってたから、もちろん李沢さんの影響も大きかったけど、そういう制度の活用も、すごく大きく影響してると思う。昆布運搬機っていうのはね、ブルドーザーのキヤタピラあるでしよ、あれを小型化してね、ブルドーザーのキヤタピラは鉄製だけどゴム製なんだね、そして運転席があつて、荷台がダンブになってるんだね。だから、船着場からその運搬機に積む、そしてゴムのキヤタピラだから国道の端っこの方、小型特殊免許あれば運転できるものだから、それで干し場まで運んできて干す。その昆布運搬機がちょうど補助対策事業で導入されたあたりでもあつたからね、せっけいからっていう理由で入会する会員も多いからね、もちろん私もそうだったし、そこにはまだまだ、アイスの語りとかが発生してないんだ。だから、その制度を利用しちゃったら辞めていくっていう人も多いんだよ、もちろん亡くなって人もいるけど、以前支部の会員で今辞めちゃって会員じゃないうっていうのも大勢いる。

——ちよつと語るとんじやうんですけど、これまでいろいろ仕事はされてきて、そういう仕事の中で自分がアイヌ民族だとか、そういうことを考える時というのではないでしようか。仕事の中で自分がアイヌだつて感じるようなことってないですかね。

あの、アイスだからこの仕事は駄目だかつちよつとゆうことではないけど、働いてる時の同僚からね、一人だけだけね、そういう差別的な言葉があつたのは、社会人になってから一回だけ経験があるね。わりとね、学校でも優等生だったんだね。母親がそういう人だったから、学校で勉強ができてると大層喜んでくれてくれるから、それが嬉しくて子供の頃から勉強したんだね、まあもともと本を読んだりするのが嫌いじゃなかったからね。たぶん、やればそこそこ出てくる能力もあつて、それで喜んでくれるのだから、だから学校行って勉強できたから差別されることもなかったし、これで勉強できなかつたらだかつたんだらうけど。ただね、小学校5年の時、クラスで一番勉強できない子が、私に向かって直接「アイス」とはいえないんだね、だからあらあつて「あ、アイスだ」とか、あえて私の耳に入るような言動をするんだ。その手がね、クラスの中でも、なんて言うのかな、誰からも相手にされないような子でね、私は知らなかったから……、4年生から5年生に進級する時にはクラス替えがあるんだよね、で、同じクラスになって、その子と一緒にあって、あんまり友達がいらないもんだからね、まあやさしい気持ちになつて友達になるようになつたら、うちにちよくちよく来るようになったんだね。そういうふうにして、たにもかかわらず、その後だよ。優秀な和人は、絶対そういう差別的な言葉も態度もしない、自分より、そういう……何て言うんだらう、学級でも学年でも一番劣等生みたいな人だからこそ、自分より下の者を作りたかつたんだと思う、それで私がそういうふうになつて接しているにもかわらず、そういうふうな差別的な言葉、あつち向いて「あ、アイスだ」とか。してね、たまたまね、小学校5年の音楽の教科書にアイス民謡が載つてたんだね、「ピリカピリカ、タントシピリカ」って唄い出しではじまるんだね、それをその子はね、「ピリカ」っていう部分をそうは読まずに「ピカリピカリ」って言ってるんだね、最初は何のことかわからなかったけど。そのアイス民謡を俺の前に来たら歌っているものなのさ。

——そういう人はいたとしても、支部長自身はこの人は和人だとか、アイスだとか、そういう区別しているのは、たとえれば友達を作るうえで気にするようなことではないという感じですか。

ないね。結婚する時にやっぱり、まだ、今みたいな気持ちじゃないからね、自分の子供が髪の毛が濃いや、アイスの特徴が強くなることは望まなかったから、結婚はアイスの女性とはしないっていう気持ちで自然に出てきてたね。これは、ほとんどのアイスの人がそうだと思うよ。アイス同士の結婚なんてほとんどないからね。だから、家内も和人なんだ。他の管内の支部長たちとこういう話をしても、やっぱり同じでね、アイスの血を薄めていくっていう経緯を辿つちよつてるね。100%じゃなくても、会員でも、ハーブ同士の子が結婚してるっていうものもあるからね。けつこうそういうのは100%じゃないけど、それに近い数字だと思うよ。今となつてみればね、私の子供に、血の濃いアイスを残したかつたんだよ。そうすると、家内を裏切ることになるからそういうことは絶対しないけど。

——これから将来のことをお聞きしたいと思うのですが、今後、支部全体のこととは別に、ご自身がこういうふうになつていきたいのかな、こういうことをやってみたいのかな、こうなつたらいいなっていうようなこととかがあつたら、教えていただけますか。

アイス語が消えないで、そして、残ってほしいな。「ご自身が」ってところで聞いているから、ちよつと的から外れてるけど。自分の先祖の四分の三の血、その先祖が否定されて抹消されるようなことってというのは、非常に残念に思う。だから、アイスももちろんだけど、差別した側の和人の側にもきちつとした歴史認識してもらいたい。そうすることによって、けつこう差別されるべき民族じゃないってことにみんなが気づいて、今はこういう立場だからそういうことを一つでも二つでも減らそう、きちつとした理解をしてもらつよう努力をしよう、今はそういうふうな考えようになつてるね、これからだ

という立場になっていくかはわからないけども、そういう気持ちは非常に強い。

——文化のことなども、これからいるいる踊りをやっつけていきたいという気持ちは、あるいは踊りだけじゃなくいるいるものを…

まあ、踊りでも、自分にできることは何でもやるけど、さっき言ったようなそういう…、アイヌが堂々とアイヌだと言えような環境作りが一番の望みかな。踊りとか何とかよりも、そういうものの方が…、全道にアイヌって言葉ない仲間が大勢いるからね、やっぱりウタリ協会っていう組織は、道内でアイヌが組織している団体としては一番大きいんだわ。その執行部が堂々とアイヌって言葉ないようでは、全道に居る今でもアイヌって言葉ないアイヌの血を引いた人たちにそんな自覚なんて発生しないだろうから、自分も自信をもってアイヌと言えようにならないと。今はそういう気持ちは、そういう気持ちはなくなってるように活動、環境作りについて役立てばいいかなと。そのためにね、やっぱりアイヌ語を後世に残していくような活動とか、今回チセを作ってるけど、チセ作りも北海道にアイヌ民族がいて、そしてこういうチセに住んでたっていうので、目に見えるものっていうのもすごくアピールできると思うんだ。何もしないで、アイヌだ、アイヌだって言ってたって、なかなか受け入れてもらえない可能性があるからね。そして、チセができたら、そこで儀式が出来るわけだね、アイヌの。まあチセ作りには、私の方からはそういう思いもあるんだわ。チセに関しては、熊谷さんにずいぶん前から言われてたんだよね、類似でもチセがほしいと。茅葺だからね、間違っても火が出たりしたら、一瞬で焼失ちゃう可能性があるよね。万一そんなことになったら、とんでもないことになっちゃうなっていう気持ちは強かったからね。熊谷さんの方から類似でもチセがほしいって何度も言われてけど、そんなわけで着手しなかった。今は、さっき言ったかたちで、目に見えるものを作ることによって、アイヌ民族を…、類似町民なんでもってけこう忘れてる人が多いかもわかんないんだわ、最近国連で先住民族権利宣言が出たり、国会でアイヌ民族を先住民族と認める決議が出たりとか、新聞やテレビでけこう取り上げられてくるから思い起こしてくれてるかもしれないけど、普段観てる人の方が多いんじゃないかと思うんだよね、一般町民ね。それはそれでいいのかもしれないけど、私としてはアイヌを…、今歴史が作りあげられてるわけだけど、その中で風化しないように、きちっとした、かつてそういう血を引いた民族がいたんだ、いまでもいるんだってことを…。そういう目に見えるものを作っつけていきたい。

——僕がこれまで東京で話を聞いてきた人だと、自分がアイヌだと思っててるんですけど、それでもいろいろ…、子供の頃は踊りの練習なんかに参加して、でも高校生になってやめてたりとか、他のことに興味をもったり、で、またやり始めたりとか、それですつとやっていた人でもイベントなどが続いて疲れちゃうとやめたくなったりと離れちゃうとか、柔らかな感じがするんですけど、そういうやり方については何か思うことがありますか。

そういう気持ちは当然だと思う。日常生活でアイヌだって意識をもって生きる必要はないからね。常にはアイヌだ、私はアイヌだなんて意識して生活する必要はない。今私が言ったように、自分の先祖がアイヌ民族であるっていうことをいつか…、このままでは駄目だ、何かの形で残そう、人にきっちりした理解してもらおうことが必要だって、それだけを感じてもらえればいいんであって、日常でいちいち意識してたら大変だし、疲れるだけだから、そんなことする必要はない、それでいいと思う。だって、たとえ、関口さんだって、常に私が日本人で、日常でそんなことを考えながら生活なんてしてないでしょ。アイヌもそれでもいいのさ。なにかあったときには、私はアイヌだって名乗り、声を出せるような

人であればいいと思うよ。

### \*熊谷カネ氏

——熊谷さん自身が、今は保存会の会長をなさっていますが、そういうふうにはやろうって思ったというの、何かきっかけがあったことなんでしょうか。

特にきっかけってないです、気がついたら、やっていたって感じ。ほら、私、兄がね、昔、40年代後半から50年代半ばくらいまで模範の支部長してたんですけど、そういう関係で、いろんなところに、支部の活動に参加するようになって、で、まあ、気がついたら、やっていたという感じ。

——なにか、意欲をもってやらなきゃとか、そういうのに燃えたというわけではなかったのですか。

そうですね、最初っから特に自分がやらなきゃとか、そういう意識はなかったですね。ただ、だからやっぱ、兄がやってるから、私もじゃあ、会員として協力しようってことで出てるうちに、いろんなことを、あれもしてみたいとか、それはありましたね、昔の料理覚えたいとか、着物を縫ってみたいとか、それはまあ、自然にそういう気持ちは出てきてはじめてたんですけど。

——お兄さんが支部長さんで、それで熊谷さんも支部の活動に参加し始めたというのは、いつごろのことなんでしょうか。

あれは、昭和44、45年くらいだと思うんですよ。それから、昭和57、58年くらいまで兄が支部長をやってたんです。ですから、その間は私もずっといろんなことを、いろんな場に出て。

——その前というのはどうだったのでしょうか。

その前は、やっぱり子供も小さかったから、支部の総会とか、そういう時は夫が出ていました。私は家で留守番をしながら、もちろん乳飲み子もいましたし。だから、会員になってから、子供が小さい間の何年間かは夫が総会に出たりしてました。

——その時、たとえば、家でやれるようなことをやっていたということはありませんでしたか。

その頃はまあ、私四人子供いましたから、一番上と下の年齢差が八歳ですから、そして二歳ずつ年齢の違う子が四人いるわけだから、けっこう忙しくて、文化の方まで手はいきませんでしたね。子供が小さい時はやっぱり、家庭と子供のことでいっぱいだから…、で、アイヌのことをはじめようになったのは、30過ぎですね。観音山にね、カムイチャシがありますでしょ、あれを建てようということになって、その時からいろんな活動を始めたんです。

——活動をはじめるとあって、ある程度お子さんたちが大きくなって、やろうかって思ったときには、すんなりやるって感じですか。

はい、ええ、なんの抵抗もなく。

—ご両親がいて、とくにお母さんは伝承をうけておられて、そういう環境にいたっていうのは、関係ありますかね。

あると思います。

—そういうのがあったからこそ、自然にはじめることができたという・・・

そうですね、はい。子供の頃やっぱり、父と母親の影響はすごい大きかったと思いますよ。私の父親はね、熊撃ちをする人、マタギだっただんで、家にはほとんどいないんですよ、一年のうち大半は家にいなくて、狩小屋があって、そこで寝泊りしながら、開拓の方の人たちの畑に熊出た、鹿出た、畑荒らされるっていうと、いつも自分の仕事ほっぽって行ってたんですね。でも、うちに帰ってくるって、すごい物静かな人で、それと大きい声も出さなかつたし、アイヌのこともやりながら、でも普段の暮らしは一般の和人の人とおなじ。同じ暮らしでした。でも母親は、私が小学校高学年くらいからね、家業は農家ですすから、母親と田んぼ行ったり畑行ったり、日曜日になると付いていくんですよ。で、帰りになるよね、薄暗くなる頃に二人で帰るんです、そうするとね、疲れているから歩くのも嫌になるんですよ。で、母親に何かお話ししてって、私お話しが好きなんです。本を讀むのも好きだったの。だから、母親になんか話して言うよね、ボツリと昔の話してくれたり、で、そういうのって、私すごいよかつたなあって思います。聞いた話って、歳とってからちゃんと思ひ出しました。若い頃は忘れてたのにな。こうやって、あちこち行ってお話しするようになったら、だんだん思ひ出したの。

—その頃、そういう中で、熊谷さん自身は、アイヌの文化というものがあって、それとは別に日本の文化があったっていうようなことは認識していたのですか。

なんとなく違うってことはわかかってましたね。父親がアイヌのことやってるのも、これは違うっていう・・・、一般の和人の人とは違うって。それと、みんながそういうことをきちつとやってたというわけじゃないんですよ、私が育った頃には。ほとんどみなさん和人の暮らしになつてたから、その中でカムイノミしたり、きちつとアイヌのことができてるって人はだんだん少ない時代でしたから。私は、自分の親がなんでも、お寺のこともやる、和人のこともちゃんとやって、アイヌのこともやってみてっていうのは、自分の中では何も、なんの違和感もなく、見ていました。

—たとえばご両親が、熊谷さんに「これはアイヌの文化なんだぞ」とか、「昔はこうやってたんだぞ」とかって教えられたわけではない・・・？

そういう特別・・・、父から教えてもらったっていうことはないです。それは、私が女の子だからだと思ひます。上の兄たちはやっぱり、親父からこんなこと聞いたぞとか、けつこく教えてくれたことあるんですよ、年とってからね、でもやっぱり、私は女の子だから多分、男のことはあんまり言わなかつたんだねえって。母からは聞いてたんですけど、父から聞くっていうことはなかつたんですよ。それでも、まあ山に行つてどんなことがあったとか、たまにはね、ちょっとくらい、私じやなくて母親に話しているのを聞いたりすることはありましたが、男親から直接教わつたということはないんですよ

ね。本当に見てただけ。

そのころって、今こうやって思い出せるのは、小学校高学年からですから、そういう意識っていうのは特になかつたです。

—普段の生活のなかでお母さんから物語を聞かせてもらつたりするようになつたことがあつたということ、特にアイヌの文化っていうのはこういうものだったことを聞かされたりするようになつたことはなかつたよ。

そうですね。ただ普段の生活のなかで、たとえば、アイヌの女の人っていうのは、人が来たら、「ごはん食べなかつたか」って聞くでしょ。食べてなかつたら、在るものをだして食べてもらう。それからお客さん迎えたときもそうなんです。特別なごちそう作らないけど、一緒に食べて泊まってもらうとか、そういうのをごく普通に、うちはよく人が来る家だったから、うちの親の家ね、本当に人の出入りの多い家だったから、私も自然にそういうふうなものなんだん自分のなかでも持っていたなあって思うし。でもそういう生活の中で母親が嫌しく言つたのは、もの嫌いしちやいけない、それは「イペエマカ」ってアイヌ語で言うんですけど、もうひとつは「イペエンナラ」と言つて、食べ物を惜しんではいけない、人にね、何かせつかつ美味いものがあるってもししかなければ、人に食べさせないと、そういう食べ物を惜しんだりしてはいけない、これは本当に私は何度も聞きました。

—でもたいていの他の家の人たちは、そういうことがなくて、和人の人たちの生活と変わらなくなつてきていたとすると、自分の家だけにそういうものがあったということに、何か違和感のようなものがあったりとか、そういうことはありませんでしたか。

いやあ、今ね、思い出せば、やっぱりあつたふうふうにアイヌのことをやっていたのは、うちの親と、何人かやつてたくらいじゃないんです。でも私は、そういう大事な何かがあるところに、もちろん女の子だから連れていってもらえないんです。兄たちは、カムイノミとか、そういうときに連れていってもらつてるの。でも、うちの親は嫌しかつたからね、女の子はそういうところに連れていってもらえなかつたし、もちろん、アイヌの習儀があつても連れて行つてはくれなかつた。だから、今こうやって思えば、ああ、ちよつと他の人とは違つたかなと思うけど、その当時はわからなかつたです。

—でも、それを嫌つてもいいじゃないですか。

はい。嫌だということもなく・・・

—自然にやつていたということなんです。

そうですね。

—そうすると、30歳くらいで、支部の活動もするようになったときも、そのまま何の抵抗もなく・・・

そうですね。保存会もできたのは昭和58年なんです。それ以前は、静内でジャクシャイン祭りとかありまして。そういうときに、各支部の踊りあるでしょ、そういうときに類似もやるよっていうことで、

支那の女の人何人が集まって、踊りの演目を二つ、三つ練習して、それでそこで踊った。それが最初でしたね、古式舞踊をはじめたのは、で、そのときは、私の母も元気でしたから、母から習ったり、いろいろなおばあちゃんたちが居て、教えてくれたものを一緒に行って、ジャクシャインで踊って。そういうこととしてるうちに、保存会を作ろうということだ。

——保存会のなかで、ジャクシャイン祭りで踊りをやるということ、お母さんやおばあちゃんたちから踊りを教えてもらおうということですが、それ以前に、家の中で、踊りなどを教えてもらおうということとはなかったのですか。

——家の中で歌とか踊りか踊りを教えてもらったということはないです。見た記憶は、ありますけど、子供のころにね、大勢の人が踊っているのを見た記憶はありますけど。母から特別教わったということはないです。

——大勢の人が踊っているのを見たというのは…

——あれは、多分ね…、父が熊を獲ったときに、部落の人とか、あちこちの人が集まったんだと思う。すごいたくさんの人がいて、みんなが輪になって踊っていたのを見た記憶はあります。

——でも実際にやりはじめたのは、保存会でみんな練習するようになってからということ…

そうですね。

——それをやるということについて、好きといった気持ちはあったんですかね。

——うん、嫌いではなかったわね。やったら楽しいって思えたし。だから、なんて言うかな、私って、「これは私がやっていかなきゃいけない」とか、気負ったというか、そういうのは全然なくて、もう自然に始めて、自然に楽しんでやってたっていう感じ。

——お母さんから「やりなさい」って言われたわけではなく、

——いいです、でも喜んでくれましたよ。私の母だけじゃなくて、おばあちゃんたちとか、みんなねえ、「これから若い人たちがやってくれなきゃだめなんだから、あんたたち頑張ってくれよ」って、みんな口を揃えてそう言うんですよ。喜んでくれましたね。で、喜んでくれるから、やっぱり「頑張らなくちゃ」って思いますよね。

——やっつよかつたなという感じ…

うん、そう。

——同世代の人で、そこでそうやって練習してた人っていうのは、結構いたんですか。

——そうですね、居ましたね。同世代っていうと、亡くなった季沢さんとか、もうちよつと上の人とかね。だか

ら、その保存会以前に、一緒に踊った人はほとんどもういないとか、体がなくなったり、亡くなってたり、あとホームに入ったり、ですね。今のメンバーはほとんど、保存会を立ち上げたときから居る人が多いです。あとから入ってきた人もいますけど。

——そのころだと、財団はもちろんなかったわけですけど、そういうなかで活動をやるっていうのはいろいろ大変なことが多かったんじゃないかと思うんですけど、たとえば、何かやるときに援助があるわけじゃないですか、そういうのはみんな協力的な感じがしたんですか。

——うん、ただ、財団はなかったけど、私たち、横似民族保存会として活動をはじめたときに、日高支庁からほんの僅かでしたけど…、いくらかの援助があって、それで布を買って、みんなの着物を作って。それで、平成3年に、古式舞踊が無形文化財になるための調査をうけて、平成6年に指定になったのかな。指定になってからは、指定団体として年間いくらかの助成金がくるんですよ。それでもって活動してきました。それでもね、指定団体、保護団体として認められるまでは、本当にね、現金としては年間11万円くらいだったかな、あの当時支庁からくるのが。あと理物支給として反物が10万円分くらい。あとね、白老の博物館から各保存会に5万円ずつの援助があったんですよ。昔、今は白老からの援助はなくなっちゃったけど。だから、年間20万円くらいあって、それでもって活動してたんです。それでもね、昔は反物買ったりなんかないから、なんもお金なかったりして、どこか行くっていったら、みんなもちろん日当なんて無いし、屋敷代も大変だったりしてね。車乗り合わせて行くにしても、ガソリン代くらいは払えたり、払えなかったりして、しばらくはそういうときももあったけど、無形文化財の指定を受けてからは保護団体としての援助があるので、それでもって今もずっと活動してます。

——熊谷さんが活動しはじめたころって、何か集まる場所というのはあったんですか。

——決まった場所というのは無くて、横似町には生活館が十軒くらいあるんですよ、だから近場の生活館の空いているところを借りて、そこで練習して。今の生活館がありますですよ、あれ建つ前にもっと小さな平屋の生活館があったのね。でまあ、たいがいそこを集まってたんですけど、やっぱりそこで他の自治会なんかも使うとなると、そこで出来ないので行くほうに行ったり、そうやって、あつちこつち転々としながら練習したり。

——そのころの活動って、何かお祭りがあったり、イベントがあったりとか、何かの前の練習のために集まるという感じなんですか、それとも、定期的に一週間に一回だとか、一ヶ月に一回だとか集まるよくな…

——最初はね、覚えるためにね、定期的に集まってたけど、みんな働きながらだったから大変なんですよ。もちろん私も働いてましたし。だけど、それでもけっこう定期的に集まって、練習したり、縫い物したりしてましたね。

——今の生活館ありますよね、昼間、カヤの作業をして、そのあと集まって、お茶飲んで休憩して、そういうかたちで使えるような場所がなかったということなんですかね。

——そうですね、そういうふうにする場所はなかったです。それでもね、最初始めたころはね、土建屋さんの宿舎が空いて、もう使わないからそこ使ってもいいよって言われて、そこでみんなが木彫りの彫り

物をしたり、最初のうちはそういうこともやってきました。でもみんなやっぱね、なんて言うの、みんなの顔見れば木彫りしたあと、コーヒー飲んで休憩して、いろんな話したりして、それが楽しいから来るといって人も、きつと居たと思えますよ。今でも、アイヌ語教室とかね、年配の人とか、俺は今からアイヌ語習ったって覚えられないし、覚える気もないけど、みんなの顔見たいから来るんだって言うてる人もいます。

——講演会とときの話なんですけど、出利葉さんが、熊谷さんのお母さんがこういうことを言っていたんだと、「自分が言っておかないと様似のものが残らない」といったような…、熊谷さんはその言葉がすごく衝撃的だったと語っておられましたか…

「自分が言っておかないと様似には誰も知ってるものがないと思われて、それは恥ずかしいことだ」って、おばあちゃんがそう言ってきたよって、出利葉さんが聞かせてくれて、だったら私が親のやっていたことを少しでも伝えていくのが娘としての務めかなって思ってたんです。

——それは、いつぐらいの話でしょうか。

これはね、1999年か2000年ごろだと思えます。あの「アイヌ語様似方言辞典」、語彙集ね、あの事業のときに一緒に出利葉さんにお会いしたんです。

——そうすると、先ほどもお聞きしましたが、こういう言葉は聞く以前は、本当に、自分がやらないといけないんだといった感じでやっていたわけではなかったんですか。

私はのん気っていうかさ、あんまり、「自分がこれをやっていないとダメだ」とか、力が入らないっていうか…

——僕も東京で話を聞いた範囲では、大抵の人はそうでした。僕の方が、人に話を聞いたりする前は、やっぱ、自分と違う、日本人とは違う民族が居て、で、その人たちは現在自分たちの異なる文化を残そうって意欲的にやってるんだらうなって思い込んで、人に話を聞きに行くんですけど、そうすると、自分が最初に思い込んでいたことはおかしかったんだなって気付くんですよ。

うん、そういう人もいるんですけどね。やっぱ自分がやらなきゃ。あんまり力入れて、気張ってやったら疲れますもんね。だから、楽しみながらやらないとね。だから、この様似方言の事業したときにね、あれは中川先生が、「狐のチャランケ」っていう、私の母親が語った物語のテープを送ってくれたんですよ。そして、出利葉さんからは小さい物語を語っているビデオをいただいたんですよ。それで、その「狐のチャランケ」と、あと、佐藤知巳さんから「様似のヤイラップ」というのと、あと中川先生から「チャクチャクカムイのトウイタツク」のテープが送られてきて、で、その事業をやっているときに、その頃もうイタカロンローやってましたよね、「熊谷さん、イタカロンローにこの「狐のチャランケ」か何かで出てくれたら、この事業としても良いんですけどね」って何気なくちらっと言われたんですよ。「あそこよ。じゃあ出るわ」って（笑）。そんな調子なの、私って何気なくちらっと言われたで「狐のチャランケ」をやったんですよ。初めてね。親からも、その「狐のチャランケ」はろくすっぽ…。私も家で自分でも録音したんですけど、働いてて忙しかったからほとんど聞くんこともなく、しまってたって、それで中川先生からテープをいただいたときに、「あれしたしか私もこんないつだったか

録音したよね」とか思って、探したらあったんですよ、やっぱ。だから、生活が忙しかったから、なかなかね、ばあちゃんのをじっくり聞いてどうしようとか、なかなか思えなかったんですよ。そそれで、千歳ではじめて「狐のチャランケ」を語って、そのときね、旭川の杉村フサさんがね、審査委員だったの。「とってもう良かったよ」って言ってくれてね。こんな立派なフチにこう言うってもらえたから、「そうか、もう少し頑張るか」って思えたり。

——それで、そういうテープを聴いたりして、それが自分のお母さんのものだとか、何て言うんですかね、たとえばそれがお母さんじゃない他の人のテープを聞くっていうのと、自分のお母さんのテープを聞くっていうのは、あるいはお父さんのカムイノミのテープとかもそうですけど、何かやっぱ違う感じはあるんじゃないですか。

やっぱ、自分の親のっていうのは、すーっと自然に体の中に入ってくるっていう感じ。たとえば、その言葉が全部はわからなくてもどういうことを語っているかについては何度も聞くうちにわかりますし、言葉も何回も聴いてるうち、だんだんわかってくるようになるんですよ。最初に聞いたときはテンションカンブンだった、本当に。でもねえ、中川先生がテキストとしてちゃんと和訳も入れてね、そうしてくれたプリントを見ながら聞いたら、その後は、それを見なくてもだんだんわかってくるんですよ、聞いただけで。だから、私は、やっぱ親の他の人の話を聞くときは違いますが、もちろん、他の人も好きな話はないっばいあるんですよ。鍋沢さん、日高敏別のね。好きでね、よく聞くんですよ。いつか、これをした方がいいかながら、だいそれたことを考えながら聞くんですよ。だから、他の人の聞くのも好きですよ、やっぱ親のっていうのは特別な思いというか、自然にすーっと入ってくるっていうか、自然にそんな感じがしますね。

——ちよっと突然とした質問になっちゃやうかもしれませんが、出利葉さんからの言葉を聞いたことによつてやってみる気になったというのには、様似のアイヌ文化についてやってみようっていうことなのか、それとも、特にご両親のものかについて、そういう区別みたいなものはあるんですか。

私、先生にそういうふうに言われて思ったときは、親がそういうふうなふうに思ってたんだら、じゃあそれを伝えていくのは私の役目かなって思ったし、その当時は自分の親のものをやろうって思ってた。だって、そのころってね、そんなに、今みたいに他の人の人のテープとか身近に聞くことはなかったよ。今ならね、けっこういろいろあるんですよ。でも当時はそんなにないから、やっぱ自分の親のものをやろうって思ってた。で、その後もう一回イタカロンローに出たんですけど、だから、最初、親のものをやろうって思いましたね。語りの部分ではね。あとそれ以外のことはね、踊りのこととか、アイヌの食べ物のこととか、着物に刺繍するとか、そういうところでは、様似のものだけをやるうとは思わない。どこのでもいいから覚えてくれたらやろうって思いました。ただそのときは、出利葉さんに言ってもらったときは、私が母親のをやっていたころって思いました。

——僕が話を聞いた東京の人たちも肩の力抜けた人たちで、ずっとこれを一生やりつづけるんだらって思ってた人たじやないんですよ。子供のころは親たちに言われてやってたけど、高校になれば恥ずかしくてやらなくなるでしょ、とか、あっちこっちのイベントに呼ばれて踊って、疲れてしまっば、しばらく休みたいなくなって辞めてしまったりですか、人生のときどきで変わるというか、そのときは一生懸命やるんですけど、そういう起伏のようなものって、熊谷さんのなかにはあまりありませんでしたか。



いや、今あります。以前はなかったです。やっぱり何かと忙しいと、「はあ、疲れてきたなあ」って思えます。だから、少し休みたいたいとか。休みたいたいというのは、辞めたいということじゃなくて、その団体の関わりじゃなく、自分の好きなようにやっみたい、自分の好きなことを気楽にやりたいって思うときはありますよ。全然諦めちゃうとか、そういうんじゃないかと、そろそろ疲れてきたから、この役割とかを誰かに任せて、自分のやりたいようにやりたいなって思うときも、正直言って、あります。

——話はさかのぼって、30代の、活動を始めたころの話なんですけど、そのときにやっていたことって、具体的に言うて何でしょうか。

私が一番最初に関わったのは、チャンを建てる、あの事業にかかわったんです。もちろん出来上がってからはカムイノミしたり、イチヤルパしたり、それがまず最初ですね。

——それで、シャクシャイン祭りに行ったりしたときには、踊りをやりもしましたよね。アイヌ語の勉強もはじめてたんですか。

そのころやってたのは、踊り、歌、料理……。刺繍はね、そのときはグループとしてはまだやってない。ただ、私の親の古い着物が郷土館に置いてあったんです。着物を縫いたいなと思って、それを借りてきて、何にもわからないし、だれも教えてくれないんだけど、一人でその図案をとって、それでどうにか布にその図案を書いて、一人で縫いはじめて、なんとか仕上げた。だから、グループとして支部活動としてそのときやってたのは、シャクシャイン祭りのときの踊り、チャンを作ったときは、カムイノミしてイチヤルパして、踊って、みんなで作って。だから、料理を作ったことも母親から教えてもらったの、その頃に。浦河の博物館に行きましたでよ、あそこメモノコの骨があるということで、イチヤルパをするからって言われて。それ84、5歳のころだね、きつと。で、イチヤルパするからって、私の母親が行くので、行かないかって誘われたんです。それで行ったんです。そこで、イチヤルパに使う料理を母親が教えてくれて、私の姉、それから姉の友達と、5人くらいでそこで料理を作ったの。そのときに、アイヌ料理の作り方を母から教わって、そのときはすごいよかったですの、私。そこへ行って、イチヤルパに使う料理を大体習って、覚えたの。だから、その後も何の苦労もなく、ずっとやってきてるから。それだって、ごくごく自然に覚えたんだよね。ただ行かないかって言われたから行くって言って。

——料理教室みたいな、先生が居て、まず材料を示して、作る手順を丁寧に教えてくれてっていうものとは違うんですよね。

だって、いきなり見て、作りながら説明を受けるわけだから、私たちもそれを一緒にやって覚えるって感じだから、料理教室とは感じが違いますね。

——踊りなんかと一緒にやりながら覚えていくような感じなんですか。

そうですね。踊りもそうやって。シャクシャインに行くから帰って、兄に言われて、女の何人か帰ってくれよって言われて、それで6、7人集まって練習して、覚えたっていう……。そのときは、三つくらいが目玉なかってんですけど。そのなかで今やってるっていったら、チャピア、ツバメの踊りね、そ

れからシカタクイクイ、東風の踊り、あとは輪踊り。

——そういうシャクシャイン祭りなんか、人がたくさん集まってきましたよね。アイヌの人だけじゃなくって和人の人も。そういう場所では、人に見られるっていう経験があると思うんですけど、そういうことに抵抗を感じるようなことも全然なく、自然に……

はじめてシャクシャイン祭りに行ったときね、はじめて行ったときはたしか踊りには出てないんだわ。それで、私は子供を負ぶっていったんですよ、そして、何かね、写真撮る人だね、すごい付いてくる人いたの。それは、嫌だなって思った。私が子供を負ぶってても、下るしても、抱いてても、なんか構えて見てるんですよ。嫌だったのはそれだけです。あとは、別に、最初に行きたときは、着物もなかった。ただ、母親と兄に付いていったんです。最後のボロリムセのときはね、みんな見よう見まねで参加したんだけど。ただ、やっぱり人に見られるってことで、そのカメラでずっとくっついてきた人は何なんだろうって。今だってシャクシャイン行ったら、写真は撮られるけど、黙って撮らないわね、大概の人は「撮っていいですか」って。

——やっぱり東京で僕が聞いた範囲では、踊りも好きだし、刺繍も好きだし、やってるんだけど、やると人に見られて、「あなはアイヌなんですか」とか言われたりするのが非常にひっかかると。そういうのはなかったですか。

くっついてくる変な人はいやだったけど、あとは、いやだっと思って思うこともなかったし。まあね、人前に出て行くことが嫌だったら、活動できないもんね。人に見られることは、そんなに苦にすることはないけど。今、人に見られるっていう話が出たから、小学校の時代にね、学校の先生たちがたくさん来たんですよ、父のところに。うちはね、こういう茶の間があって、けっこう大きな量の部屋だったんだ、12畳くらいあって、そこに囲炉裏があって、父がその囲炉裏の火を起こしてね、先生方は囲炉裏のまわりにぐるぐるといっばい座って、なんか話してたんです。そのときのね、うちの母のおもてなしはね、お餅焼いたんだよ。あん餅を焼いて、先生方にね、振舞ったから。農家だからって言うのもあるし。お米や小豆があるから。だから、お餅を焼くことが特別のご馳走ってわけでもないんだわ。で、私はお茶を淹れたりするを手伝ったんだけど、次の日学校行ったらさ、校長先生のお子さんと私はおんなじクラスだったの、そうしたら「岡本」って行ってその同級生の子が来たんだ、それで、私で何気なく「うん」って言ったの、「お前の父さん、アイヌの酋長なんだって言ってたぞ」って言ったのさ。それで、私も「うん、そうだよ」って言ったのさ、「うちの父さんが立派な人だって言ってたぞ」って言ったのさ。そしてここにいた仲間みんなビックリした顔して見てたけど、でも、だからといっていじめられることもなかったし。あともうひとつは、学校に父が来るんですよ、参観日に。でさ、あの和人の子供さんたちから見たらやっぱり異様に見えると思うんだ、髪の毛はしてさ。でも、父はね、おしやれな人だね、出掛けるときは必ず山高帽かぶって、きつとワイシャツ着て歩く人だったの。山に行くときはおんぼろのズボンはいてね、でも学校に来るときはちゃんとしてやってくる。それで、ガラって戸を開けるとみんな振り返るんだよね、私もつい振り返ってたら父が来たの。そのときはやっぱり女の子だったし、三年生くらいだったの、だから恥ずかしいかなって思ってたけど、まあでも、立派な父親だったなって思うわね。その先生方がうちに来たのは五年生くらいいときだったんだ。だから、子供のころはそういうことも思ったりもしたけども、大人になってからは別に見られることに聞いて何とも……。

——今の生活館ができるまでは、そういうことをやっていたのが自分たちの場所ってわけじゃなくて、

とで離れていっても、そのうちにもっと大人になって結婚して、子供ができてきたりして、子供の手が離れたりしたときにでもね、テレビでもいいし、どこかでアイヌの踊りを見たら、私もそういえば昔やっていたって思ってた、またやりだしてちょうだいって。どこにいてもいいから、そういうふうには懐かしく思えて、またやってほしいって、言ってきました。いろいろ事情があって離れる子もいるからね。やっぱね、戻ってきてくれた子もいます。一度は嫁似から出て結婚して、でもいろいろあるんじゃないですか、戻って帰ってくるっていうのは、保存会に戻ってきてくれて、今一緒に入って活動してくれている子もいます。

——今活動していらっしゃる人たちは、やっぱり子供さんの手が離れたっていう世代の人が多いのですか。

そうですね。でも、20代の子とか、10代の子も何人かいます。親子5人でやっている人もいて、母親40代、上の長女が20代、その下が20歳くらいと、17歳と、まだ11、2歳の子と、親子5人で女の子の人ばっかりやってくる人もいます。だから、将来はこの人たちがしっかり受け継いでいってくれるかなって思います。でも、私たちが支部とかの活動を始めて何十年も経つわね、もうね、そうすると、もうそろそろさ、50代くらいの人で、中心になってやってくれる人がほしいんですけど、でも、なかなか今はそうなるってはいない状態で、それが難しいですね。

——十年前には新しい法律ができました、今はまた有職者懇談会ができましたりとかしてんですけど、そういう大きな動きが保存会の活動に影響を与えているというようなことはあるんですかね。

いや、いまのところはないですね。

——いままでどおやりやってきましたことをつづけていくということでは…

はい、そうですね。今のところは、特別変わったところはないです。そ—将来もそんなに変わっていかないような気がする、私はね、本当はね、もっとやっぱ、もっとやっぱ、真剣に学びたい人のためにね、なんかそういう学べる環境ができてくれればいいなとは思っています。うん、やっぱ20代、30代の若い人たちがアイヌ文化に本当に目覚めて、しっかりとやりたいと思ったときに、自分の生活がまずあるでしょ、そしてたらなかなか、今この厳しいご時世ですから、難しいと思うの。だから、そうじゃなくて、本当に学びたい人のために、そういう環境を作ってあげられたいなと思って思っています。最低限生活していけるだけのものを何かね、用意してあげられたいです。だからどんなにいいかなって、

——生活の方が忙しくて、文化のことがやり難いっていう状況が…

そうですね、そういうのもありますよ。やっぱりさ、人間、生活が大変だったらさ、こんな文化だの、刺繍だのって、やるって気持ちになれないでしょ。私も生活が大変だから自分も働いて、働かながらなるとかやってきましたけど、今はね、こうやって年金生活になっただけど、やっぱり働いてるときは大変だよ…。自分もそうだったから、よくわかるのよ。だって、時間に追われるでしょ。仕事から帰ってきたら、ご飯支度しなきゃいけないでしょ。夫もいたんだからね。そして、夫のご飯支度して、テーブルに出して、自分は食べないで済ましたよ。だって、食べる時間ないもん。5時とか5時半くらいまで働いて、帰ってきたらすぐ顔洗って、手洗って、夫の食べるもの用意したら、もう自分の食べるひまないから。

あそこ生活館ができたら、ある程度は自由に使える自分たちの場所だと思って、そうすると、そうすると、その前と後で、グループでの活動が何か変わるっていうようなことは…。今までだったら、踊りの練習をするとか、何か目的があった、そういうときにしか集まれない場所、今だったらお茶を飲んだりとか、そういうことだけでも集まれる場所があると、何かが変わるんじゃないかなって思っていますけど。

うん、そうですね。今だったら気軽に集まって。ただお茶飲むために行くっていうことはないけど、でもまあ、ちょっと何か行事があるときに、じゃあ打ち合わせしようかかって集まったら、いろんな話しながらお茶飲んだり、コーヒー飲んだり、やっぱりそれってすごいいいなって思っていますよ。

——今まで、わりと個人的なことをお聞きしてきましたけど、保存会会長の熊谷さんに保存会の活動についてお聞きしたいなと思うんですけど、今の活動、具体的にはいるいるな練習とかあると思うんですけど、現在は、どのくらいの頻度で、どのくらいのメンバーの規模で、やっているのでしょいか。

そのときによってね、なんかがあるときにははげごう頻繁に集まったりし、正直に言いますと、やっぱりどこかに行くと行って踊らなきゃいけないっていうときは、けっこう回数多く集まって練習します。そうでないときは、やっぱり働いている人もいるから、その他に縫い物もしなきゃいけないから、着物縫ったり、鉢巻縫ったり、こういう制練習をしたらね、そういうこともやらなきゃいけないからね、そんなに踊りだけに頻繁に集まるってことはできませんけど、でもどこかに行くと行って踊ることになると、みんな真剣に集まってきてくっついてくっついてくっついて、週2回3回集まったりして、一ヶ月くらい前から。だから、今はなかなか定期的に集まれないんですけど、それでもけっこう集まっています。人数は今、21人くらいいるかな。そ—やっぱり、すぐ集まれるのは、17人くらいかな、なかなか全員でいうわけにはいかないんですけど。仕事で来れない人もいます。だから、全員集まるっていうのは、めったにないですね。それでも、女の人は、踊りによってはね、いないと出来ないうりもあるんで、なるべく集まれるような状態とか、日にちを選んで、集まれるような日にね。そうですね、15、6人は集まりますね、いつも。

——熊谷さんから見て、みなさんがどういう感じでやっていると、みなさん全体の雰囲気というのはどういう自身の場合だと肩の力を抜いてやっていると、みなさん全体が、みなさん全体の雰囲気というのはどういう感じなんですか。

いや、もちろんね、これを次の世代に渡す、しっかりと受け取ってもらいたいのが私たちの願いなんです、みんなそういう思いはあります。でも、なかには、支部で世話になってるから、自分が協力するんだと、そういうことを言う人もなかなかはいません。だから、まあそれぞれですね。あと、楽しんでやってくる人もいます。でも、やっぱりみんなの思いは、今自分たちがやっていると、次の世代にしっかりと受け継いでもらおう、それはみんな同じ思いだと思います。

——今の状況は、どんな次の世代に教えて…

うーん、なかなかそうはいかないだね。ただね、嫁似は昔から子供がいたんですけど、たくさんね、そして、やっぱりある程度高校を卒業したらね、就職するとか、大学行くとかで、地元を離れますよ。そういうときは、いつも、私たちは送る会というか、送別会をやったんです。今までどうもありがとやうって記念品を贈ったりして。そういうときにいつも私も私が言ってきたのは、今は仕事やいろいろ



って、しっかり踊ってくれたんですけどね。

——これまでの活動で、保存会の活動なんかをはじめ、最初のうちはお母さんたちから教えてもらうようになったんですけど、それから長年続けてこられて、今では教える側になって思うんですけど、それで何か自分の考えとか、何か変わったものとかありますか。

いやあ、自分では気がつかないですね。そうね、自分で最初に、誰にも教えてもらわずに縫い上げた着物が、うちの奥家に古くからあったもの、それを縫ったことですごく勉強になって、一人で縫い上げたことによつて次に教えられるようにもなったんですけど、別に私は特に変わった思いとか、それはないですね。教えるっていつも、やっぱり何人かで、亡くなった季沢さんとか、あと何人かで相談したりしながらやってきたから。でも、そうやりながらも、私はいつも季沢さんに言うてたんだ。「今はこうして、私たちね、一緒に頑張ってるけど、いつ、私たちがどういふことあるかわからないよ」って。

——今、アイヌ文化をやるという若い人たちがたくさん出てきてますけど、伝統的なもの、昔の人たちがやってきたことをそのままやるというよりは、自分たちなりにアレンジして、変えて、やりたいう人たちが多と思うんですけど、それは人それぞれやり方でやればいいと思うんですけど、熊谷さんの場合ですと、それについてはどういふお考えですかね。熊谷さんにしてみれば、自分のお母さんがやってきたことをそのまま伝えていきたいと。

もちろんそうです。若い人たちが変えていくのも、それはそれでいいのかなって思うんですけど、ただ、あちこちに行つて、それを目にした人たちが、これがアイヌの伝統的な歌や踊りだと、それは困るなって、正直言うところそういう思いがあります。

——熊谷さんが、見る人たちに、昔の伝統的なものをちゃんと理解してほしいと思うときに、伝えたいと思うことと、何か言葉になりますか。

難しいね、それってね。いやあ、私は今まで、そんなことは特別意識しなかつたけど、でも、私はこうやってだんだん齢とつてくると、やっぱり昔のアイヌの人たちがききといるんならね、形にしないでなくなつた人たちがたくさんいるだろうし、歌の一つも録音した人もいるだろうし、たくさん残した人もいるんだけど、でも私は、有名になっていないおばあちゃんたちでも、ちょっとしたことでも聞いたら教えてくれるから、私もそういう人になりたいなって思うし、そういうふうにはアイヌの本当の思いっていふか、本当に先祖のことを伝えてきた人たちのこととか、先祖が残してくれた文化のことを、ほんの少しでも、そのままだ形ですら、少しでも伝えていきたい。そういう思いです。それって、やっぱり、思いつく、すごい大事なこと。そういう思いっていいのは、なかなか言葉にできないんですけど、私は最近本とか読んでも、昔のアイヌの人たちの思いがわかるんですけど、すごくわかるのね。若いときに読んだとは、また違うのね。おんなじ本を読んでも、若い30代、40代のころ読んだのと、今読みかえてみるのでは、受けた感覚が全然違うなあって思うんです。今だと、本を読んだだけで、すごい思いが伝わってくる。だから、私もそういう思いを、なんとか伝えて、残していきたいなって思うの。でも、自分がアイヌなんだからアイヌのことを当たり前にやってく、ということじゃありません。

——僕がどこまで理解できたかはわからないんですけど、なにかこう、自然にやっついていくみたいな感じがあるっていふか……

うん、だから、まあ、私も、来てほしいうって言われれば大概のところには行つて話をするんですけど、だからといって、私はなんにも偉そうなこととか、偉そうな意見は何も言えないし、だからやっぱり、自分が見たこと、自分が聞いたことを伝えていくのが、ごく自然にそれを伝えていくのがいいのかなって思うし、アイヌ文化フェスティバルとか、そういうところにも何度か呼ばれて、あちこち行つたんですけど、やっぱりその思いつくのは、私はけっこう皆さんがわかってくれたかなって思うんです。アイヌ語のちよつとした物語とかね、語つたときに、何人も人が声をかけてくれるんですよ。だから、そういうときで、やっぱり来てよかったなあって、みんなわかってくれたんだなあって思うんですよ。だからまあ、そういう小さなことで、なんて言つたらいいんだらうね、自分がアイヌであることを小さなことでやってくしかなかったんだらうね。

——物語をやつたりして、思いが伝わつたなって思うのは、会場の雰囲気ですかね。

そうですね。本当に物音一つなく聞いてくれて、終わったときにけっこう声をかけてくれるんです。良かったよとか、声がかきれいだっただよとか、で、私は自分の番が終わつたらすぐ降りていって、声をかけてくれた人に、ありがとございますって。そうしたら、すごい喜んでくれるもんね。だから、会場がしんと静まりかえつて聞いてくれるときは、来てよかったって思います。

### \* 古緒牧子氏

——古緒さんは今、この事務所でウタリ協会の生活相談員をやつていらつしやいますか、それには何かきっかけというものがあつたのでしょうか。

あう、ちよつと癒になりまして、それが子宮癌でね、で、手術した後に、しばらく仕事もしないで家にいたんです。そしたら、こちらで働いていた方がやめたので、誰か代わりに探してた時に、ちよつと家にいた私に話しがあったので、それじゃあ、家にいるのでね、させていただきますってことで、それが入つたのがきっかけ。

——それではじめたのがウタリ協会の相談員という仕事で、それはアイヌ民族のことに関わるわけですが、それでも、それをやるにあつたのはスムーズにとりかか、何の抵抗もなく……

うん、そういうのは全然、そういうのは何のこだわりもなく、ただ、ここに季沢さんという方がいらして、その方ね、「いやあ、私のような者がね、こういう相談員とかがつて、出来るんでしようか」っていうふうに関わりたいんです。そしたら、「やる気さえあつたら、できますよお」って言われて、で、わたしも離れてね、で帰ってきましたので、子供三人いましたので、じゃあもう頑張つてやってみようってことで、ただ、アイヌのこととか、ウタリ協会っていうことは、何のこだわりもなく入りまじりませんでした。

——ウタリ協会の仕事って言うのは、今回みたいなサセ作りとか、いろんなアイヌ文化のことに関わると思うんですけど、古緒さんは何かそういうアイヌ文化に関わるよななことって言うのは……

してなかったです。なかったです。で、自分も正直言います、母はアイヌじゃやないんですけど、父がアイヌの血を引いてまして、でも自分には差別とかそういうのも何もなかったんですけど、で、自分自身がアイヌだっことさえ気がつかないっていうか、家の中でさえ、そういう会話もなければ・・・、そのアイヌの人に対する差別っていうのは、私のまわりではなかったと思うんですけど、ですから、全然ここに入るのにも何のこのかわりもなく、アイヌ文化のことも全然知らないで入りましたから。

——実際、入ってみてどうでしょう。アイヌ文化に関するいろいろなこともご経験されたと思うんですけど、何か感想みたいなものはありますか。

私は、差別される側にも原因があるはずなんですって、っていう考えがあったんですけど、学歴がないんです。私は、実家が最初には子供のころは非常に貧乏で、私の妹、弟は大学にも行きませんでしたし、でも私の子供のころは家が非常に豊かで、高校まで行くような状態じゃなかったんですけど、それで私は高校へ行っていないんです、中学校までしか行ってないんです。ですから、せめて自分の子供には、きちんとした教育を受けさせようっていう考えがありました、で、アイヌだから差別されるんじゃないやなくて、一人の人間としてね、アイヌの部分もあって、一人の人間として、きちんとした責任を持った行動をとってあげば、差別を・・・、差別ってどこの世界でもあるでしょ、社会的にいろんな差別がありますよね、だからアイヌだけが差別されるんじゃないやなくて、だからアイヌとしてじゃなくて、一人の人間として、きちんとした教育を自分の子供に受けさせて、で、社会に出てもきちんとしたことをできる教育をしていかなければいけないのって、私すごい思ったの、ここに入ってきた時、それで、一年くらい、この保存会に入らんかったの。考え方の違いがすごかったんで、一年くらい入らんないでいて、ただ相談員として協力するって形で、一年くらいは一切保存会には入ってなかったの。というのは、アイヌの中に入って踊りを踊るのが恥ずかしいとか、そういうところにいるのが恥ずかしいんじゃないやなくて、みんなとの考え方の違いが非常にあって、付いていかれない部分があったの。

——さきほど、「ごだわりがない」ってことをお聞きして、それですと相談員をやってこられて、あの何か・・・、僕の誤解というか、受け止め方の違いかもしれないんですけど、アイヌ文化のことを保存会でやったりすることが、仕事の中でのことというか・・・、そういう感じに聞こえたんんですけども、そういうことなんでしょうか。

というのはね、私、相談員研修があって、そこに行くとな、大概の方は「アイヌとしての誇り」って言うのね、でも私にしてみたら、それは、「アイヌとして」じゃなくて、一人の人間としてね、それなりの自信をもって生きていくんじゃないのって。自分のひとつの生き方のなかでね、「アイヌだから、アイヌだから」じゃなくて、たとえ「アイヌ」って言われたら、「はい、そうです」って言うなかで、きちんとした自分の・・・、何て言ったら・・・、自分の生き方というか、自分の子供にもきちんと教育をして、で、親として普通に子供に教育する中で、普通の生活を。差別される、差別されるっていうんじゃないやなくて、こつちもやっぱり相手を傷つけることはいっぱいあるし、向こうからも傷つけられることもある、それは、人間と人間の生き方の中でのいるんじゃないやなくて・・・

——聞いて、いいなって思ってたところがあるんですけど、考え方が、最初はちょっとちがうなって思ってた、それでも一緒にやってみたくてですけども、・・・その考え方が違っても、入ってて、それが周りのギャップになるのか、そういうことがなくて、考え方が違っても一緒にやっていたという雰囲気があるということなんでしょうか。

だからやっぱ、私は、アイヌの人だから嫌いとか、シャモの人だから付き合うとかじゃなくて、私は、人間と人間としてお互いに付き合っている部分ってありますよね、こう、すごく気の合う人とか、お互いに話の合う人とか、そういう部分で付き合ってますので、実際みんな良い人ばかりでしょ、みんな一人一人良いんですけども・・・

——その・・・、アイヌということにこだわりのないってところ・・・、これまでお友達がたくさんいたと思うんですけど、誰かと仲良くなる時に、仲良くなれるかどうかは人間的な部分で決まるとは思うんですけど、その時に、相手がアイヌの人かどうかとか、そういうことは考えに入らないですか。

いや、全然、考えてないです。だって、アイヌの方でも、そういう意味で尊敬できる人もたくさんいますし、そうかと言って、人間で、良いところもあれば悪いところもあるじゃないですか、ねえ。だから、シャモであっても、アイヌであっても、やっぱ、シャモであってもこの人とは付き合うことができないって人もたくさんいますし、そして、アイヌの血を引いてる方であっても、もちろん私もそうなんですけどね、やっぱ尊敬できる方もたくさんいますし、だから、私は、アイヌだからシャモだからっていう部分の中で付き合う気は全然ないです。やっぱ、ここに入ってきた時にね、結局私はアイヌ文化のことを知らなかったし、自分がアイヌの血を引いてても全く興味がなかったっていうか、でも、ここに入ってきたことによつて、いろんな人と出会える、いろんな人と話ができ、お友達になる・・・、出会いがあるってことは、すごく良かったなって思ってる。うん、だから、こうやって、開口さんもお会いできるのも、やっぱ、うれしかったなって思ってますし、だから、ここに入ってきたこととか、マイナスだとは全然思わないです。自分の考え方が、「そうか、間違ってたんだなめ」とか、「あ、でも、ここはちょっと違うんじゃない」って、やっぱこう、自分自身の中でいろいろ勉強させられる部分はたくさんありますね。

——相談員を仕事ははじめられてから一年後に保存会に入られて、いろんなことをやられてこられたかと思うんですけど、具体的に言うと、たとえば踊りとか、そういうことをやられてこられたか。

私はね、着物はね、まだ一度も縫ってないのね、それはやっぱ自分に自信がなかったのと、やっぱ、稍氣して、癒になって、目を使うってことは非常に体に負担がくるんです、それで、今まで着物だけは全然作ってなかったんです。でもここに来てはじめて、やっぱ自分で着物を作ってみようかなって言う、作らないと駄目だなって思ってる。着物を作るってのは大変なことなんですよね、一枚仕上げるっていうのは、すごい大変なことなのね。皆さん一生懸命作ってるなかで、それをただ着て踊るだけじゃなくてね、自分も作って、そしてそれを着て、踊れたら一番いいなって。やっぱこう、いろんな方も作ってみたいと、わからないんじゃないかになって、いろんな部分のことかね、だから、いろんな方と知り合いになることができて、いろんな勉強が・・・、やっぱシャモの方たちとはまた違った独特のものがあるんじゃないやけど、いろんな勉強・・・、いろんな深いものが、それができてるってこと良かったなあって。

——特にそのなかでも、これが楽しかったなっていうのはありますか。

うん、札幌の「かでの」に展示する時に、みんな小物を、マタンブシとか、いろいろなるものを作ってたんですけど、「あ、これを仕上げなかったら、こまでは仕上げたけど、これ以上の部分は日

にち的に大丈夫かなあ」って思った時に、ちよっと私が用事があって、その部分ができなくて、いなかっただのね。で、帰ってきたら、それが仕上がったんで、みんなで仕上げてたんで、帰ってきたら、「こここうしといたよ」って言われた時にね、私・・・、「うわあ、うれしー！」って。言わなくてもね、みんなね、してくれただんって思ってたの。そういう、何ていうの、人間と人間の・・・、気持ちのね・・・、言わなくてもやってくれたああって、お互いに協力し合うっていう部分か、なんかすごく良かったなあって思っています。だから、私はね、自分の仕事に関して、会員の人がたと、保存会の人だと付き合っていて、人から、いろんな中傷だとか、言われるのが、一番嫌なの。でも、みんなそうやって一生懸命がんばってるんだよって思えたり、そういうのが私にはあるんで、だからそういうことで「ああ、良かったあ」という思いがありますよ。みんなに感謝すること、たくさんありますよ。ただ、いろいろありますけど、そこには、でもやっぱね、良いところを認め合っていたらいいなあって。だから、こうやって、今は芽を一生懸命頑張ってるので、私はすごくいいなあって思うんです。

——アイヌ語教室には参加していますか。

参加しています。参加してんですけど、はつきり言って、本音を言えば、それは先生にも何回も言ったと思うんですけど、アイヌ語を覚えるのは、それはそれでいいんです。でも、私はまずは社会に通用するのはアイヌ語じゃないよって、英語とか、中国語、韓国語、まずその方々を自分の子供に教育して、だから、そういうものができると世の中に通用するんで、アイヌ語ができるからって世の中に通用しませんよ。ただ、それは、自分の興味とか、そういう分野で大学行って勉強することはすごく良いと思うんです。自分が興味をもって一生懸命することは良いんです。でもアイヌ語を子供たちに教えて、それが、じゃあ、社会に通用するか。今アイヌ語の通訳なんて必要ないですからね。いくら覚えても。だから、私は、まずは、子供たちには、アイヌ語よりもそっちの方を一生懸命勉強してちょうだいって。そして、大学行ってね、その中で自分が興味をもってアイヌ文化を勉強するのは、それはそれですごく良いと思います。ただ、襟似出身で、アイヌの人に行って、アイヌ文化というものがあつて知ってますから、聞かれたときに、「知ってますよ」って答えられるぐらいのね、やっぱりせつかく襟似にいるんだから、それぐらいの知識は覚えてほしいなあっていうのはあります。ただ、子供たちに無理にアイヌ語を覚えなさいって言うのは、私は全然思いません。私はそういう考えがあるので、アイヌ語はアイヌ語で、アイヌ語で、アイヌ語で、アイヌ語は、アイヌ語は、奥が深いし、本当にいろんな言い方があるから、本当に難しいと思うの。

——アイヌ語に対してそういう考えをもった古館さんがアイヌ語教室に出ているのは・・・

ただ私はやっぱり、この仕事をするなかでね、アイヌ語も覚えなさいって思いたいながら、でも正直言って、なかなか覚えることができないって言うか、まあ仕事のなかでそれが入っていますから、しますけども。ただこういって十年以上もやっていると、もうちよっとこの仕事を辞めて、違った社会のなかでやってみたいって言うのも、でてくるんです。で、女の人って言うのは、家庭があつて旦那さんがいて、子供がいて、そっちのこともしなさいいけない、その中で自分の仕事のアイヌ文化を勉強するっていったら、なかなか・・・、時間と、家族がそれを理解してくれてできるなら良いんですけども、この仕事をすると、土曜、日曜も仕事をする人が多いですよ。だからやっぱり家族が、「え、今日もお母さんいないの？」って、男の人はさ、たとえば相談員やっていたって、それは仕事だから、残

業になろうと、土曜、日曜が仕事になろうとまあしようがないかって部分がありますけども、女はそうはいかないですよ、仕事よりも自分の家庭を、家族をきちんとしていかないと、パラパラになつた時にはじめて気がついて遅いから、だから男性と女性との違っているのではありませんよ。

——これまでのところは、本当にアイヌのことに何のこだわりもなく、意識もないう感じだったと思うんですけども、それは、子供のころから、自分のおじいちゃん、おばあちゃんですとか、家族の中とかで、そういうアイヌのこと聞くっていうことは本当になかった・・・

全然なかった。

——近所にもアイヌの人はいなかった・・・

あのね、友達もね、アイヌの子っていませんけど、私は、この人がアイヌだったことも知らないっていうか、意識することもなく、女性なんですけど、その子はすごく成績が良くって、優秀だったの。だから、それだけで、何ていうの、「あ、この人すごいな」って。でね、うちの子供たちが、山口県で生まれて、向こうで育ってね、で、向こうは同和に対する差別がすごくあったんで、同和と朝鮮人に対する差別がすごくあったんで、で、私は、強いて、自分の子供たちにアイヌだとかかっていうことは全然・・・、むしろ、私が小さいころからそういう話も全くなく、で、結婚した人が山口県の人で、自分がアイヌっていう意識も全くなく、子供が3人いて、で、こつちに遊びに来た時、あのね、親戚の人のおうち遊びに行ったら、その家の子供たちがやっぱりアイヌとして差別がすごくあったって、その子供たちと話をした中でね、すごくあるんだよね。でもね、うちの子供たちは、その時、自分がアイヌだったことは全然知らないのね、自分たちもアイヌだったことを、それでね、アイヌとのあいだの子だから、顔もそんなにね、アイヌだって顔をしてないのね。そして、うちの娘がね、「お母さんね、アイヌの人って頭いいよ」って、それで、「すごい綺麗だよ」って言うんですよ。それで山口県に戻って、その・・・、なんか、そういう作文を書いた時に、まあ受賞したんですけどね、アイヌの人に対する差別っていうことで作文を書いたら、まあ優勝したんですよ。それで、離婚して帰ってきて、娘が学校終わって勤めに入った時に、まあ、自分がアイヌってことを私が言ったんですよ。そして、うちの娘が、「えっ、本当に？」って言うから、そうよって言ったわけ、「うれしー」って言うんですよ。「普通のね、血の何も入っていない日本人よりも、アイヌの血が入ってるってことは、お母さん、すごくいいことだよ」って、「ああ、よかったです」って、うちの娘が言ったんですよ。それで、ああそう、娘がそういうふうにも思ってくれるなら良かったって、そういうふうな話もしたことがあるんですけどね。

——僕も勉強不足なんですけれど、東京ですこしアイヌの人に聞き取りをやらせてもらってたんですけど、するとやっぱり、北海道ではああだった、こうだったっていうのをいろいろ聞きまして、そういう人たちの中には、喫茶店で話している時に、その場で泣いたり人もいて、僕が聞いたかぎりでは、東京のほうで、答えても何人かかわからない状況なんですけど、北海道の場合だと、アイヌの人だっているのがすくわかって、それでいろいろ辛い思いをすかかって、よく聞いてたものだから、きつと今回もここにきてそういう話をたくさん聞くことになるんだらうなって思ってたんですよ。でも今お話を聞くと、あまりにも僕が変な偏見をもつて考えてたんだなあって。そういうのがないっていうのは、古館さんの周りではそういう感じなんですかね、それとも全体的にそういう感じなのではないか。

どうなんでしょうね。私と支部長さんは、年が一つ違いなんんですけどね、あの人がたは結構差別があったって、よく聞くんです。でも、私は、鈍感だったのか、まわりはアイヌだなとか、そういう意識はなかったんです。ですから、そういう部分ではね、全然、「あつ、この人はアイヌだな」とか、そういう意識はなかったんです。ですから、私は、差別されることは、昔からね、アイヌの人っていうのは働かない……、働かなくても働く場所がなかったのかどうかはわかりませんが、やっぱりお酒を飲んで……、まああんまり仕事もしないで、毎日そういうことやってるってイメージがあるから差別されるのかもしれないんですけど。

——さしつかえなかったら、年齢を聞いてもいいですか。

いいですよ、今 56 なんですけどね。やっぱり私はね、山口県で、18 年間住んで、そこには同和の問題とか朝鮮人の問題とかがあったし、こっちに帰ってきた時にすごく感じていたのは、ましてこの仕事に入った時に感じるのは、アイヌだから差別されるのはあるのかもしれないけれど、もう少し自分たに自信をもってね、自分がたの力で、なんとかやっついていこうっていうものを持って、それを子供に教養していかなくちゃならないです。絶対についてまでも……、差別はどいっていてもあるんだよってことを、皆が理解してくれたいなあ。アイヌだから差別される」じゃなくて、やっぱり教育の問題。いろんな問題があるじゃないですか、仕事の問題とか。その中で子供にそういう思いをさせないためには、親が一生懸命、子供をとにかく大学まで入れて教育しなかつたら、この子供たちが社会にたどるときにね……。やっぱり教育がないことは、絶対に差別につながるよって思うんです。もちろん人には偉そうなことは言えませんが。ただ私の考えで、自分の子供に教育してききました。だから、アイヌじゃなくて、一人人間として誇りをもって、頑張っていけたらいいんじゃないかなって思う。

——もし子供たちが、何かやってみたいとか、興味を向いたら……

それはそれでいいと思いますよ。だから、興味をもってやってくれたら、それはそれで、じゃあ礼儀支那があるから入ってみようかって思うんですけど。奈良に行ってもそれはすごい感じるんですけど、同和の人がたと交流があったんですね、そして、すごい毅然としてるし、きちんとしたボリジャーみたいなものをもっての。それで、私たちが泊まったところの会館を、助成金じゃなくて自分たちの力で作ったりして、で、それを聞いたら、えらいなあって。だから、同和の人がたの気持ちで、すごく強いものを持って、きちんとしたものを持ってるのね。

——それとこの感覚というのは、先ほどのお話では近所に優秀なアイヌの人がいたってことですけど、何かそういうことが印象に残っていたりしますか。

そこのおうちは会員に入っていないですから。ただアイヌだっただけで、それなりの差別はあったのかもしれないんですけど、やっぱりアイヌの人って、頭がいいんじゃないかなって思うの。だったら、もう少し自信をもって、その「アイヌだから差別される」じゃなくて、差別されるってことはその人の人間性に関して何か問題があるのかなあって。だから、私は、シヤモの人でも嫌いな人は付き合えないし、アイヌの人だって、まあ本当に好きだなんて人もいますしね。

——アイヌである前に人間として一人前であるべきだという考えになる動機というか、きっかけとして、

近所にいた優秀なアイヌの女の子の存在があったのかと思ってたんですけど。その女の子がすごく立派で、強く頑張っているから、これがいんだって……

違う、違う。私はね、この田舎でね、漁師の娘で、教育も何にもない。結婚した人がお医者さんの息子で、で、みんな医者なの。彼も大学出て、その兄弟もみんな大学出て、お舅さんも大学出て、みんな優秀なんです(笑)。で、どういいうわけか縁があった、そういう運命だったんでしょね、その人と出会って結婚して、山口に行っただけです。その時に私は、こういう教育も何にもない、家柄も良くない、なんにもない中で、その人と結婚して山口に行った時に、前の旦那さんはね、人を判断するのにね、大学出て、家柄が良くて、仕事がエリートコース……、こういう人が優秀な人間だっけって言うの。でも、私は、それだけで人間を判断してほしくないって、自分で思って、子供たちにそれを言い続けてきたの。向こうは自分で会社やりましたから、父は産婦人科で非常に忙しくて、そういうのを見てて自分絶対産婦人科や医者にはなりたくないって、それで大学出た後ずっと世界中あつちこつち歩いてた人間なんです。考え方も非常にいいものたくさん持ってるんですけど、自分の家がお医者さんで、親戚全部が医者で、そういう中で、家柄が田家だとかっていろいろのすごく重んじてたところがあるの。で、その中で、会社をやって、主人が社長で従業員がいて、そうすると自分たちの子供もその人間関係に入るとしよ、

——ああ、上下関係……

そう、でもそれじゃ駄目だっけって思うんですよ。子供には、社長って言うても従業員がいてくれて初めて社長としてられるんだよって、あなたたちは「社長の子供」でもなんでもないよって、みんながいるからこそ学校にも行けるんだよって、そういうような私の考え方で子供に言ってきたの。だから、人を立派だっけって判断するのは、家柄とかが教養だとか、そういうもので人を絶対判断しないだっけって、三人には言ってきたんです。そういう部分ですごくいい勉強をさせられたっていうのがあるんですけど。ギャップがあまにもあって、そうなんです。だからね、なんでそういうところに結婚して行かなくちゃいけないんだらうかなって、多分運命だったんだと思います。

——聞きそびれちゃったんですけども、結婚して山口に行かれる前はどちらにいらしたんですか。

——類似です。

——離婚されて類似に戻ってこられたのは、正確にいうと、いつのことになるのですか。

平成 7 年の 4 月かな。

——非常に突然とした質問ですが、類似に帰ってきてから 10 年以上になりましたけど、その中で自分に変化があったら、何か思い出すことってありますか。

それは、たくさん、その場その場のことがあるんですけども、人と人との、お互いに助け合う、こつちが出来る事はしてあげたいとか、やっぱり人間って一人では生きていけないじゃないですか。人から助けてもらったり、支えってもらったりしなきゃならぬ今生きてるんだなって思うんですけどね。ただ、変化して……、あ、そう、一つだけある。相談員になったから、今の旦那さんと出会えた

んだらうなうって思う。私はなんでこの様に帰ってきたんだらうって思ってたの。で、ここに入ったのも多分、病気をして前の仕事を辞めて家に居たから、この相職員になったんだなって。で、相職員になって、今の旦那さんと出会ったの。

——これが何かアイヌのことと関わるとは思えないですか。たとえば、絶対再婚しないって思ってた自分が変わったことに、アイヌのことが何か関係してたことではないですか。

アイヌのことが関わってこうなったっていうのは・・・まあ彼は会員なんですけど、監査委員だったんですよ。監査して、で、年に一回、こう出会うんですよ。このアイヌの仕事をして出会ってますから・・・でも、アイヌの仕事をしたからそうなるというは、私は全然思わないですね、というの。私の人生の生き様のなかでこうなってきたらいいから、だから、そういうふうになんてあるんだらうなあ・・・、山口まで行って帰ってきて、ここで縁があって入って、で、ここに入らなければ無論みなさんと出会うこともないし。でもね、最後に言えることは、まあ、ここに入らなければすごい思います。そりゃあやっぱり差別をされる側のいろんなこととか・・・で、いろんな人と出会えるっていうのが一番最高ですね。だから、ここに入ると一番良かったのは、いろんな人と出会えること、で、いろんなところにも行って、回和の人たちとも出会えたし、だから、それが私にとは最高に良かったなって。で、台湾の人が来た時、この下でね、台湾の人がたの音楽っていうのをやっていたんですけど、それだって、普通台湾に行っても聞けないような歌であって、この仕事して良かったなあ。だから私に対する批判とかいらない、私にだってそういう原因があるんだなって思いますが、だから差別っていうのはお互いによっばりさ、片方だけがあって、もう片方が絶対ないってことは、絶対ありえないと思う。だから、ここに来てそういう仕事ができるってことは、すごく良かったなあって思いますよ、本当に。

### \*高瀬純治氏

——高瀬さんご自身は今（インタビュー時）、副支部長をやってらっしゃいますが、そういう形で、支部のことにかわわっていくとか、保存会のことにかわわりはじめたというのは、いつぐらいのことになるのでしょうか。

まあ、ウタリ協会とかかわりだしたのが、十七、八年くらいになるのかな。結婚して、子どもが生まれてからだよな。その頃、もうずっと姉さんが事務に入っていて、いろんなこととすことがあって、まあアイヌの血があるからっていうので入ったの。それで、誘われたらちゅうかな。もともと、妻の親がアイヌの人だったんだ。で、そうやって入ったんだけど、俺は別にアイヌの血筋ってわけじゃないんだけど、その後、子どもが学校へ行くっていうときに補助があるわけですよ。そういうあれで、ソフトボールとか、いろんな行事にはちよこちよこ行ってたけど、そんな熱心に行ってたわけでもないんだ。たまたま地区の理事をやった人が他の地区に引越してないから頼むって言ったのが、そもそものはじめなんだ。まあ俺も、ちよこちよこという、いろんなことにはでてたから、そんな難しいもんじゃなかったってことで、まあ、事務から物がきたらそれを配布するとか、そういうことが主なものだから、それで理事になって。そうしたら、前の副支部長が漁組の監事もやっていたから、「忙しいから俺やめる」っていうから、あの時俺にやれっていうあれで、本当は断ったんだけど、名前書かれたらそんな

ことになっちゃったわけで、そんな感じで（笑）。

——高瀬さんは、生まれてからずっと札幌市に住んでらしたのでしょうか。

高校まで札幌にいて、高校卒業してから市内に十年、札幌に五年か。雷印に就職したんだよね、市内にチーズ工場があって、それが50年に閉鎖になって、そして札幌に転勤になって、その後、こっち帰ってきたんだよね。

——高校までの札幌にいらした頃は、何かアイヌ民族のことについて、日常的なかでかわわたりとか...

別にないな。ただ、友達にはアイヌの人もいたし、それこそ、今チセ作るところに住んでる人の兄貴が同級生なんだ。彼は二つ下なんだ。で、うちの親父がカメラ屋やっていたことがあって、その兄弟ってのはカメラが好きで、けっこううちに遊びに来てたんだ、俺も行ってたし。だけど、なんて言うかな、別に俺アイヌだからっていう感じでもないし、ただ友達だったから。

——友達になった相手はまたアイヌだったということですかね。別にアイヌだからどうこうっていううんじやなく。

そうそう。うちの親父もカメラ屋やる前は現場に勤めてたんだわ。俺小さいとき、自転車に乗せられて阿田の奥の方まで連れてってもらって、熊谷さんの親父さんなんかも知り合ってたから、だから、熊谷さんところも、うちの親父が写真撮ってくれたんだっていうのがあったし、けっこうそういう人はたくさんいるんだよね。

——高瀬さんご自身も、熊谷さんのご両親とかと...

熊谷さんの親父さんがクマ獲った時の写真あるよね、あれを撮ったっていうイメージはあるんだけど、それ以外はね、あんまり覚えてないよな。

——それっていうのは、高瀬さんご自身の場合だけじゃなく、様似町全体でそういう感じ...、あまりアイヌのものを見たり聞いたりすることがなく、意識することもなくといった...

うーん、どうだったんだろね、俺は全然そういうのを意識することがなかったんだけど。ただやっぱ、俺が小さい頃、小学校なんかでは馬鹿にするっていうか、差別するようなのは居たけど、アイヌだとかって言っても、俺はそんな感じでもなかったし。うちにも、けっこう岡田の方の人とか遊びに来て、飲んだりなんかしてね、別にね。その人たちも、アイヌの人とか何とかって考えたこともなかったし。ただ、熊谷さんなんかと話してたり、昔の人なんかの話では、誰彼って言うるとき、「あ、その苗字聞いたことある」って、そういう程度でね。

——アイヌっていう日本人とは違う民族がいるっていうのは、知識として、高校生まで知っていたわけですよ。



いや、それもないんだ、他の民族っていうのもね、ただアイヌ、アイヌとはみんな呼んでたけど、アイヌの人だっていうのはわかっても、それが民族だというのは全然考えたこともなかったな。ただ、友達としてつきあう、昔から親父の代から行き来してるから、それについて歩いて歩いたから別に…、そういう感じだったよ、俺はね。

—それから、雪印に就職されて、静内、札幌に行かれてる時に、アイヌのものを売ったり、聞いたり、人とかかわったりっていうことはなかったのですか。

なかったね、とくに。

—様々に戻られて、さきほどお聞きしたようなきっかけがあって支部に入られた時、何の抵抗もなく、違和感も特になく…

違和感とはとくになかったね、だけど、まあどつちかっていうと、子どもがいろんなことで世話になるわけですよ、そっちの方がつよい。世話になるからっていう、そっちの気持ちはの方が強かった。制度を利用させてもらっているというかな。

—とくに民族の違いみたいなものを意識することもないといった感じでしょうか。高瀬さんご自身もアイヌの血筋ではなく、奥さんの方がそういう系統で、それで支部に入る…、自分とアイヌの人の民族の違いみたいなものを意識させられるような場面というのはとくにないということでしょうか。一緒に仕事して、一緒に活動して…

俺も別に何の勉強もしてなかったしさあ、だから何ていうのかな、民族だからどうのこうのっていうのは…、いや、いろんな制度があるのを知ってるけど、ウタリ対策としてのお金がけっこいろいろ出るわけですよ、なぜこんなに出るのかなって、はじめは疑問に思ってたぐらいでね。なぜそんなにつけるのが強かったよな。まあ、過去をつきつめてみれば、そういう歴史があるかなっていうのはあるけど、はじめはそうだったね。

—支部に入られて、最初は事務的な仕事をされていたということをお聞きしましたが、それ以外に…、今だったらチセ作りとかやりますよ、保存会の方ではいろいろなることをやっているとお聞きしたんですけど、高瀬さんはそういう場にはどういふかわりをお持ちだったんでしょか。

俺は、そんなに出ないよ。ただ、来ないかって誘われて、じゃあ行ってみるかっていう程度で、まあ都合つけば行くっていうような感じだったよな。

—とくに印象に残った活動とかありますか。

そうね、踊りたつって何回かしか行ってないから。

—踊りは練習されてたんですか。

一緒に居て、まあ後ろの方で真似てるだけだけどね。男性も混じって踊るようなものは、少しは覚えた

かなくて。男の踊り、男性二人の剣の舞とかね、あれはちよつとね。ビデオでは見てるんだけど、支部長が踊ったのは見たことあるけど、自分ではやったことはないな。正式に習ったことないから。

—ビデオを見たりしたのは興味があったからですか。

うん、剣の舞とか、弓の舞とか見てみたかったからね、あと、チセの中で柱にぶつかけたりとか、そういうのもあったから、ちよつと…、見せてって言って。ちよつとは、興味があったんだけど。だけど、実際にやるうってことはないんだけど。それは、二年くらい前かな。

—そういうふうにして興味でできたっていうのは、何かきっかけがあったのでしょか。それっていつぐらいからなんですかね、さきほどからのお話のなかでは、アイヌのことを意識したり、興味をもったっていうことがあまりなかったようなんです、いつぐらいからそういうふうになつたのかなって。

たぶんね、理事になってからだよな。理事を頼まれて、やるようになってからだろうね。その前は、ただ、今度ソフトあるから出ないかいとか、静内のイチャルパとかたまにね、そういうので誘われて参加したぐらい。人を乗せて運転してみたいな感じで。踊りだとかは覚えてなかったから、静内でみんなが踊るとるときも見てた。

—イチャルパに参加されたというのは、困窮裏の周りに一緒に座って参加されたということですか。

一応、そうだよな。

—衣装も着て…

衣装は、簡単に着て、支部で行く人数の分を用意しておいて。

—そういう衣装をはじめを着たりして、何か思うことはありませんでしたか。

いや、別に…、まあ、儀式に参加するんだから着るんだっていろいろいしか、わかんないね。

—東京で僕がいろんな人に話を聞かせてもらったときに、やっぱり、人によっては北海道に居るときは差別がきつかったという話を聞きますし、それで僕の間でも北海道では差別が又変な感じだなんだってイメージができていたように思うんですけど、実際にはどうなんだろうかと…

なんて言うんだらう、俺もそんなにね…、アイヌがどうのっていう馬鹿にしたような感じの言い方はするけれど、そんなにいじめっていうのは…、まあそれがそもそもいじめなんだろうけど、だけど、そんなになかったよな…。俺、そういう放課後だなんだって…、とにかく中学、高校は野球一辺倒だったから、そういう学校の集まりには参加したことがなかったよな、野球以外ってのは。それであってわかんないのかもしれないけど、後で聞けば、いじめられたっていうのは、アイヌだなんだって言われたっていうのはあるけど、帯広で聞いたんだけど、差別の仕方っていうのは、悪い奴がいて、その人が通ると三人だけで、一人が「ア」って言って、次の人が「イ」って言って、最後の人が「ヌ」つ

て言って、そういうふうなのであんまり酷いから…

——着物を着たりするときに特に何の抵抗もなかったわけではないというお話だったので、僕が東京で話を聞かせてもらった人たちとは違う感覚だったんだなと思って…

いや、まるっきりこういうことを誰もしてなくて、それで着られて言われたら抵抗あるかもしれないけど、みんな着てるから別に、そういう抵抗はなかったね。行事に参加するんだから着るって言う感じはなかったね。あつ、それで、帯広で聞いたという差別の話ね、あんまり酷い酷いで学校の先生に言ったら、こう言われたって言うんだ、その責任が「いじめられる方にも問題があるんじゃないか」って。それがもう、どれだけショックだったかって、涙流して言ってたのはやっぱり、すごかったんだなあって思ってたね。そういうこと言う先生がいるんだって。この辺では、そういう感じっていうのはなかったからさ。

——静内や札幌に行かれて、そこから札幌に帰ってきて支部に入られたときに、そこにいた人たちがいてというのは、高瀬さんが子供の頃、高校生の時までに普賢会つたりしていた同級生とか、そういう人たちが多かったんですか。

いや、それこそさっきの同級生くらいのもんだからね。あと、支部長だって知らないし、熊谷さんたちのこととも知らなかったし。その頃、親が知って俺も行ってたんだらうけど、俺も子供でわかんなかったから、そういう程度のものだね。他にも同級生いたけど、アイヌだとかって認識してなかったし、わからなかったし。

——アイヌ語教室にはいつ頃から行かれるようになったんですか。

俺はその当時「理事になる以前」は、手話の方に行ってたからね、アイヌ語にはあんまり…、それこそ何回かくらいしか行ったことない。そういうのも、どっちかっつて言うのと、理事になってからだね。それではなかったら、ただそういう行事に参加してっていう程度だったのかもしれないね。

——支部にかかわるようになってきた理由の一つとして、いろいろな制度が使えなくなったというお話をお聞きしましたが、アイヌ語教室に行ったりとか、誘われて静内のイチャルバに行ったりとか、そういうこととていうのは、お付き合いっていう意味が強かったのか、もちろん自分の楽しみまでっていう部分もあったんでしようけれど、どういう感じだったのでしょうか。

支部の中にもちよこつと知ってる顔がいたりするから、やっぱり、そういうの参加しながら、行くかなって。顔合わせればあいさつくらいしかなくとも、元気がよかつたかという話しかしないけども、そういう楽しみっていうものもあるよね。何人かね、アイヌの支部に入る前に、静内に行ってるときに一緒に飲み屋さん入ったりした人とか、そういうのが何人かいるんだよね。こつちに帰ってきてから仕事がなくなくて、静内ダムの建設の仕事があったんだ、そこに一年間くらい行ってたんだけど、その時同じ部屋だった人もアイヌで、それで、その人の話とか、その人には直接行事なんかでは会ってないけど、その人を知ってる人と会ったりして、元気にしてるとかかって話をしたりさ。そういうのを聞くのが楽しいからとか。あと、他の支部がどうしているのかとかね、こういうやり方しているんだとか、ちよこつとそういうの気になったりとかしたけどね。

——それは、自分が理事になった責任というか…

うーん、責任とまではわからなないけど…、こういうところは様似町とは違うなとか。でもまあ、何も考えてなくてやってるのかもしれないな。

——僕もチセ作りを見せていただいたいて、日曜日にはけっこう人が集まったり、そうやって人が集まってくるっていうのは、みんな何かを作るとして作業自体の楽しさというか、そういうのもあって皆さん来てるのかなって思ってたんですけど、そういうことで何か感じたりすることってありますか。

なんていうかな、勉強もあれだけけど、それよりは、集まると何か、顔を合わせて楽しいっていう感じの方が強いんだよね。

——アイヌ語をやるとか、チセを作るっていう、具体的な何かじゃなくて、みんな集まって何かやる、人が集まるっていうのが楽しいということなんですかね。

いつも同じような顔ぶれなんだけどね、やってくるのはね。

——理事になられたから、すこしずつ、ビデオを借りたり、他の支部がやることに興味をもつたりするようになって、様似支部でこういうことをやったらいいんじゃないかとか、こういうことをやりたいとか、何か思うようになってきたことってありますか。

やっぱり、チセ作りはやってみたいっていうのはあったよ。一応は、平取かどこかで作ったものの図面をね、もらって、それを見て、柱何本いるのかなんかだつて計算してはいたけど、実際にやってみるといったら出来ないから、ただ自分で考えてみるだけだ。

——建築のご経験もお持ちなんですか。

ないない。俺は雪印だから。ただ、土方の経験はあるっていても、ただの人夫だから、大工のことわかるわけじゃないし、ただここに釘を打つてことはあったけど、自分で計算してっていうことはなかったからね。

——さっきちよこつとお話にでましたけど、事務所にもちよこつと行ってコーヒーを飲むってっていうのは、さきほどもおつちやっていた誰かに会うことか楽しみがあつて…

うん、そういうのがあるね。行けば、けっこう女の人も来てるしね。男の人はあんまり来てないけどね。女のひとしゃべったり、愚痴だとかを言い合ってるだけだとき (笑)。

——あそこがウタリ協会の事務所で、アイヌの資料とかいろいろ置いてありますけど、アイヌのことで行くっていうよりは、お茶を飲んだり、人と話したり、そういうことを…

そうそうそう、そうだよ、俺の場合なんかはその方が多いね。もし、だれもいなければ、コーヒー飲

みながらちよと棚の本を見たりもするけど、わかんないことだらけだけけど、気になったことは聞いてりするけど。

——事務所は、高瀬さんが支部に入られたばかりの頃は、まだありませんでしたよね。

でもね、俺がちよこ行くようになってきたときには、あそこにあった。今の相職員はアイヌのことだけじゃなくて、いろんなこと知ってるでしょ。だからかえって行きやすいのかもしれない。だって、そういう人だったら、行くとしたら、アイヌのことに関係してないといけないけど、彼だったら、いろんなこと知ってるから。

——これから、何か文化のこととか、今はチセ作りをやってらっしゃすけど、何かやっつていこうっていうものはありますか。

うーん、そうだね、すこし踊りを覚えてみようかなっていう気持ちはあるけどね。あとは、チセの材料があったから、本格的に昔のやり方で、まあチセでなくてもいいから、柱四本の倉庫みたいなものでもいいから、そういうものをやってみないかっていう気持ちはあるけども。

——高瀬さんご自身のかかわり方でいうと、これまでアイヌ民族には大変な歴史があったからこれからこういふふうやっつていってほしいんじゃないかといった、いわゆる権利の回復みたいな運動のことはあまお考えではないという感じですか。僕が会った人たちも、これはいろいろなかかわり方があって、生活とのパララもあるでしょうし、いろいろなかかわり方があると思うのですが、高瀬さんご自身はどうでしょうか。

あんまり運動的なことっていうのは…、権利とかっていうのは、どうも合わないというか、あんまり…。みんなで札幌に出て、デモとかしようっていうのは、参加はするけど、日常的にそれがどうのこうのっていうのは、あんまりね…。

——たとえば、ニュースとしては、去年の6月に国会で、アイヌ民族を先住民族として認める決議だとか、お聞きになったと思いますが、それについて支部のあれかと話したり、あるいは高瀬さんご自身になにか思ったりということはあるでしょうか。

実際にそういう場所に行ったりはするけど、それについてどうのこうのって話す人はいないな。そういうことについて話す相手がないな。今度こう集まりがあったら皆さん参加してくださいっていう話があれば、参加はするけど、その中身までどうのこうのって言うことはないな。今度、ウタリ協会からアイヌ協会に名前が変わるっていう、そのことぐらいいかな、話したのは、やっぱりアイヌっていう言葉は差別的に使われてきたから、そのことに関しては抵抗もあって、ウタリでいいっていう人もいるし、そういうことについては少し話したことがあるけど。

——アイヌ協会に名前を変えるっていうときの高瀬さんの意見っていうのはどうだったんですか。

俺は、そういう立場でなかったから。ただ、アイヌって言われる、それが差別だってことも考えてなかったから、だから、俺はいんじやないかって気はしてても、やっぱり差別された人たちがそう言

われて差別されたんだ、それで今度は子供に、今でもそういうこと言われることがあるように言われれば、そうなれば、やっぱりかわいそうかなっていう…。だから、結局自分に当てはまらないから、なんか差別のあれがね、アイヌって言う差別が自分に当てはまらないわけでしょ。自分では、別にアイヌって言われたって別に思ってるだけけど、そういう人たちにしてみればね。だから、うかつには、賛成だとか反対だとかは言えないわけ、俺自身はね。

——これまでそういうことを考えてこられたわけではないとしても、これからアイヌ民族をめぐる制度とかに関して、こうあった方がいいんじゃないかっていうものが個人的にあつたら…、さきほど、支部に入つたらしいんな制度を使えることに逆に驚いたというお話がありましたけど、そういうことにしても、何でもつけようですって、何かありましたら…

こうやって見てるとね、俺もそうなんだけど、収入的に低い人が多いよね。そういう点で、もうちょっと何か収入を上げるような方法っていうのかな、生活水準を上げるような、まあ、今、精肉で鹿肉をどうのこうのっていう…、ああいうのを嫌いだでもやりたいし、ある程度生活水準を上げていくようなことができないのかがなかって気持ちはあるんだけどな。何かって言われると、あちこちでいるんなことやってるから、それを見てても、これは嫌いだでも当てはまるかなとか、そうやって考えるときはあるけどね。だけど、そうやって考えるだけで、自分が先頭に立って、やろうっていうわけじゃないんだけど、やっぱり生活水準を上げていかないとだめなんじゃないかっていうのはあるけど、でも、今これだけ、度が薄くなってやっつていくわけですよ、そうなるかかえって今度…、その辺のことも考えるよ…、どこまで制度としてやっつていくのかとか、制度を使えるのはどこまでなのかとか、どういふふうになつていくのかなって部分もあるんだよね。なんかもう…、考えるのやめよ (笑)。

### \*佐々木みどり氏

昭和55年に住みついてから、そうだな、「行くぞ」って言えば、みんな、踊りだとか、そういうものしかお手伝いはしてないけど、ただ基本としては、アイヌの仲間に入ったときに、やっぱり私はシャマでしよ、そしたらすっごい結束力があるのね、アイヌのひとがたつて。だから、私が仲間に入つてどこかへ行つても、「お前アイヌか」とか言われまじたけど、それもちよつとシャマからしたら悔しいところもあつてね。けども、私こういう性格だから、「半アイヌだ」とか言つて、「半アイヌ」っていうのは(笑)、夫婦でいると、旦那さんって、血は流じてないけど、そういうのが私の体の中にはなんぼか入つてんだとか言つて、俺そうに言つてましたけど、そうやりながら活動し始めたのは、昭和58年くらいになりますね。ただ、この家を建てて、出稼きから帰ってきてからだから、昭和58年くらい。

——差し支えない範囲で答えていただければと思ふんですけど、僕の関心というのが、一人ひとりの人たちにどう自分のやっつていっているアイヌの活動というものが自分の人生の中でどういう意味をもっているのか、その人にとっての「アイヌ」というものがどういう意味をもっているのかってことに関心があるって、質問させていただきたいんですけど、お生まれになつたところはどちらになりますか。

生まれところは、札幌の白石、っていうところ生まれてくるのさ。それから、流れ流れて二歳のときにオホーツクの小さな部落なんだけど、そこで育つて、転々と兄弟のところの子守しながら歩いて、そ

こを拠点に、親もそこになりましたから、結局は、最終的には、厚岸で終わっただのさ。それで中学卒業だから、仕事に出ましたよね。それから、転々として…

—その中学を卒業するまでの生活の中で、たとえばアイヌって言葉とか、今思えばあれはアイヌのものだったんだなっていうようなものって、ありましたか。

いや、全然ない。まったくなかったね。居なかったんでないか。いたらね、兄弟が大きいから、たぶん、どここのあの人はアイヌだよって言うって話はずなんだけど。今の人と結婚したのは 27 歳のときで、はじめて兄弟が「お前の旦那はアイヌなんだよ」っていうことを教えられたから、たぶん、いなかっただと思う。

—話題にもならなかった…

ならなかったねえ。

—アイヌっていう存在を知らない…

知らないで大きくなりましたねえ。したから、本当にアイヌの人とかかわりありなのは、結婚した旦那がはじめての人っていうか、はじめてアイヌの人と触れ合った。だけど、まったくどこ行ってもなかったね。27歳になるまで。

—仕事をしているときなんか同僚が話したりすることが耳に入ったりということもなかった…

なかったねえ。っていうことは、今こそ厚岸にいろのかわかんないけど、まず厚岸の学校に行ってもそれはなかった。そういうんでいじめもなかったし、北見に職場をもったけど、アイヌだっている人いなくて、まったくわからずに、27歳で旦那と結婚するまでわからなかった。

—ちよっと聞き忘れてしまったんですけど、何年にお生まれになったのですか。

白石で昭和 19 年の 8 月 12 日に生まれてるのさ。だから、今は 65 歳。厚岸には、あまり居ないような状況だよ。今でこそ、結婚したりしてそういう人がいたかもしれないけど、いなかったねえ。それで、あっちこっち移っているけど、そういう人見たことないし、だから私の行ったところは、今でも支部がないように、あっち側の方は、いなかっただんじやないでしょうか。

—今から遡って考えてみると、あれはアイヌのものだったんじゃないかっていうものもありませんでしたか。

なかったねえ。やっぱり、様似に来てアイヌの人が多かったために、それでわかっただけだから、まったく私は 27 年間わからなかったね。札幌にも住んでたけど、近所でアイヌの人のお付き合いっていうのはなかったもね、5 年くらいいいだけだね。

—では、結婚したときに旦那さんがアイヌの人だとはわからなかったわけですね。旦那さんも特に

言ってなかったということですか。

いやいや、沖繩人って言うって話の。沖繩から来たの。だから、「ああ沖繩の人なんだ」って、知り合った頃、26 くらいのは、ああ沖繩人なんだって、ずっと、結婚するまで。そこで、仲間うちでもアイヌってわかんないし、「あのアイヌだよ」っていう相さしもなかったし、まったく知らないうちに嫁似に来たんだから。

—ご結婚されたときは、どちらにいらしたんですか。

室蘭。

—結婚してから、嫁似に来るまでのあいだも、いろいろなところをいたんですか。

結婚して室蘭で生活してたから、まあ出稼ぎに他所には行っただけど、何箇所も行ってるけど、そこでも会ってないね。まったく会ってないね、私。蘭越も行ったし、根室の方も行ったし、まあ内地の方にも行ってんだけどそつちの方はとも居なかったんだらうけど、北海道のあちこち行って、会わなかったねえ。

—東京でアイヌの人たちに話を聞いてると、北海道ではアイヌの人に対する差別があって、それが嫌になって東京に来たんだよって言う人も多いのですが、みどりさんは北海道のいろいろなところに行ってもアイヌの人を差別するような雰囲気はなかったんですかねえ。

なかったねえ。だから、私は、かえってアイヌの人の仲間っていうのは、すごく…。だから、結婚して間もないころね、「アイヌの人は毛深い」と、「毛深いのは愛情深い」と、そういうことをずっと言われてきてるのね。はあ、なるほどって思ってたの。たしかに、うちの旦那なんかそうですけど、普通の人よか濃いわけでしょ、で、自分で一緒に生活してみれば、本当に愛情ありますよ。で、仲間なんかとこう活動しているけど、やっぱり仲間のあれって、すごい、人の思いやりもあるし。いや、シャモにもあるんでしょうけど、でも一緒に活動しはじめて、「はあ、なるほど、本当にそうだな」っていうことが、今でもみんなにね、言うんだけど、本当に実感しましたよ。それはね、やっぱり、自分たちがいじめられていたせいで、やっぱり仲間意識が強いのか、その辺はわかりたくないけど。だから、私も仲間として受け入れてくれたときには、本当にいろんなことをすごいしてくれましたね。さすががやっぱり、愛情深いんだなってことは、私、シャモから見た感想だけだね。やっぱり一緒に生活して、旦那もそうだからね、一緒に生活していると、そうだなって思いますよ。

—「アイヌの人は毛深い」とか「毛深いのは愛情深い」といったことは、どこで聞いたのですか。

それは、だから室蘭で兄弟たちから。アイヌって何って話から、その中で、何年間か室蘭にいましたから、姉が「アイヌの人は愛情深いって昔から言うんだぞ」という話をして、いざ嫁似に来てみると、まったく本当に思いやりがあって。それは、さっきも言ったとおと、いじめられたりしたら、人をいたわる気持が自然と、小さい頃から自然と持っていくものなのかなあって。どんなものなのかわかりませんけど、私の感想としてはそういうのありますよ。夫がアイヌだっているのは結婚したときになかったのね、後から聞いて。それで、子供が小学校 5 年生のときに、この嫁似で、アイヌの人がたが、